第 161 回

埋蔵文化財セミナー

2026
8.22 土
14：00 - 16：20
永守重信市民会館
（向日市民会館）

報告 1　亀岡市千代川（ちよかわ）遺跡の発掘調査－弥生時代の拠点集落－

（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
調査課調査員　**磯部 紗希**

報告 2　京都市溝路（みぞろ）遺跡の発掘調査－長岡京の北辺を考える－

（公財）京都市埋蔵文化財研究所
調査課担当係長　**中谷 正和 氏**

報告 3　舞鶴市女布（にょう）遺跡の発掘調査－中世墓の構造と副葬品－

京都府教育庁指導部文化財保護課
技師　**濵 喜和子**

報告 4　京都市石見（いわみ）城跡の発掘調査－幻の西岡（にしのおか）の城を掘る－

京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課
文化財保護技師　**黒須 亜希子 氏**



作成途中の石器
（千代川遺跡 / 亀岡市）



長岡京跡東二坊坊間小路
北延長道路東側溝
（溝路遺跡 / 京都市）

会　場

永守重信市民会館
（向日市民会館）
向日市寺戸町中野 20 番地
第 2 会議室

阪急東向日駅から徒歩 15 分
JR 向日町駅から徒歩 20 分
阪急バス「向日市役所前」

主催　京都府教育委員会
（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

第161回埋蔵文化財セミナー

京都府内の発掘成果速報2026

日　程

14時00分　開会あいさつ
（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
常務理事・事務局長　村山和久
日程説明（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
調査課参事企画調整係長事務取扱　筒井崇史

14時10分　報　告１
「亀岡市千代川遺跡の発掘調査－弥生時代の拠点集落－
（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
調査課調査員　磯部紗希

14時40分　報　告２
「京都市溝路遺跡の発掘調査－長岡京の北辺を考える」
（公財）京都市埋蔵文化財研究所
調査課担当係長　中谷正和氏

15時10分　休　憩

15時20分　報　告３
「舞鶴市女布遺跡の発掘調査－中世墓の構造と副葬品」
京都府教育庁指導部
文化財保護課技師　濵 喜和子

15時50分　報　告４
「京都市石見城跡の発掘調査－幻の西岡の城を掘る－」
京都市文化市民局文化芸術都市推進室
文化財保護課文化財保護技師　黒須亜希子氏

16時20分　閉　会

主　催　京都府教育委員会
公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
会　場　永守重信市民会館（向日市民会館）

京埋セミナー資料 No..161-496

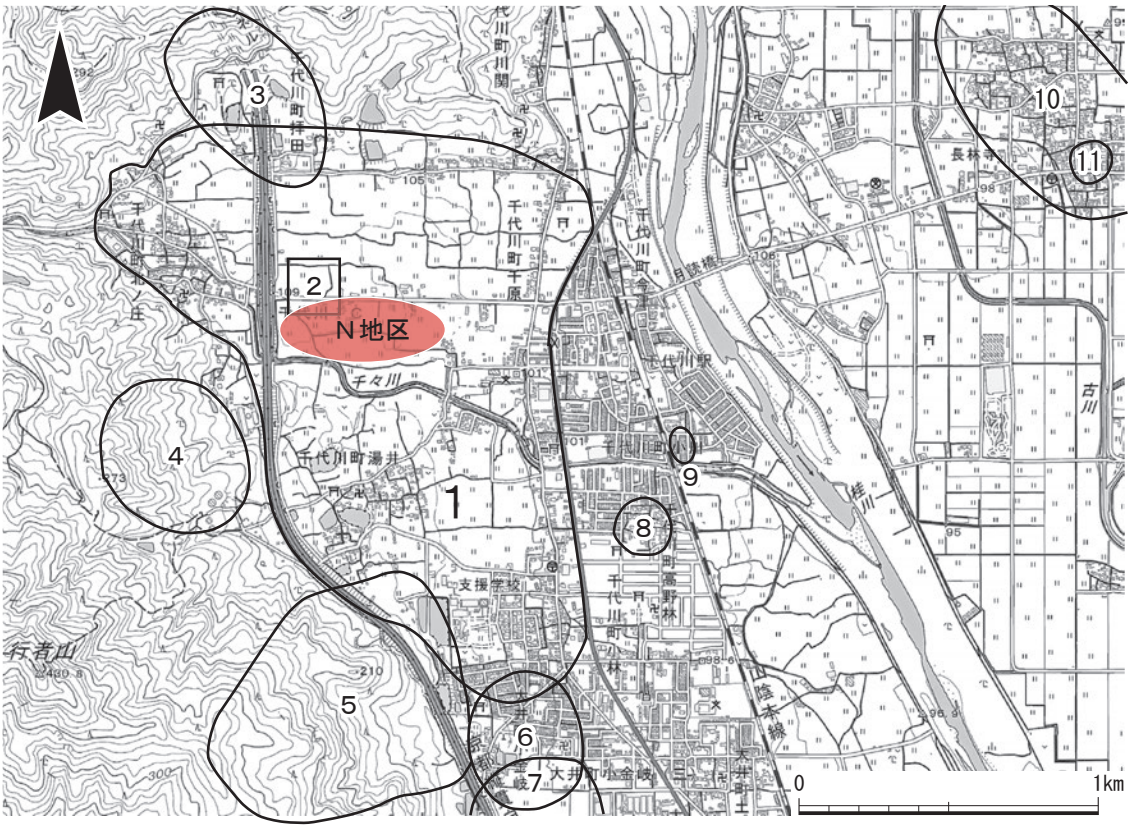
亀岡市千代川（ちよかわ）遺跡の発掘調査
－弥生時代の拠点（きょてん）集落－

（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター調査課　磯部紗希

１．はじめに

千代川遺跡は、亀岡市北部の大堰川（おおいがわ）右岸に位置する東西1.4km、南北1.9kmの広大な遺跡です（図１）。これまでの調査では、縄文時代から中世に至る多数の遺構と遺物が見つかっています。そして、丹波国府の推定地としてもよく知られている遺跡です。

今回の発表では、昨年度に行った第38次調査Ｎ地区での調査成果について報告します。Ｎ地区は、東西に流れる千々川（ちぢがわ）の北側、台地の南端に設定した調査区です。調査では、弥生時代中期後葉から後期にかけての居住域と墓域を確認しています。



１．千代川遺跡　２．桑寺廃寺　３．拝田古墳群　４．北ノ庄古墳群　５．小金岐古墳群　６．馬場ヶ崎遺跡
７．北金岐遺跡　８．高野林城跡　９．小川城跡　10．馬路遺跡　11．馬路館跡

図１　千代川遺跡と周辺の主な遺跡（1/25,000）

2．千代川遺跡の立地と周辺の環境

千代川遺跡は、亀岡盆地西部に位置しています。今回の調査では、遺跡の中央を東西に流れる千々川の北の洪水の影響を受けにくい台地の上に、弥生時代の遺構が展開することが分かりました。

調査地の北西には、白鳳時代に営まれた桑寺廃寺が位置し、近くの山裾には、拝田古墳群や北ノ庄古墳群が広がります(図１)。亀岡盆地内には、 千代川遺跡以外にも池上遺跡、時塚遺跡、余部遺跡など弥生時代の集落の遺跡が見つかっています。

3．第38次調査Ｎ地区の主要な遺構

千代川遺跡では、41棟の竪穴建物、３基の方形周溝墓と４基の木棺墓からなる墓域、23基の木棺墓群、 大きな溝と、 独立棟持柱建物等の多種多様な遺構を確認しました(図３)。遺構の種類ごとに、その様子を確認します。

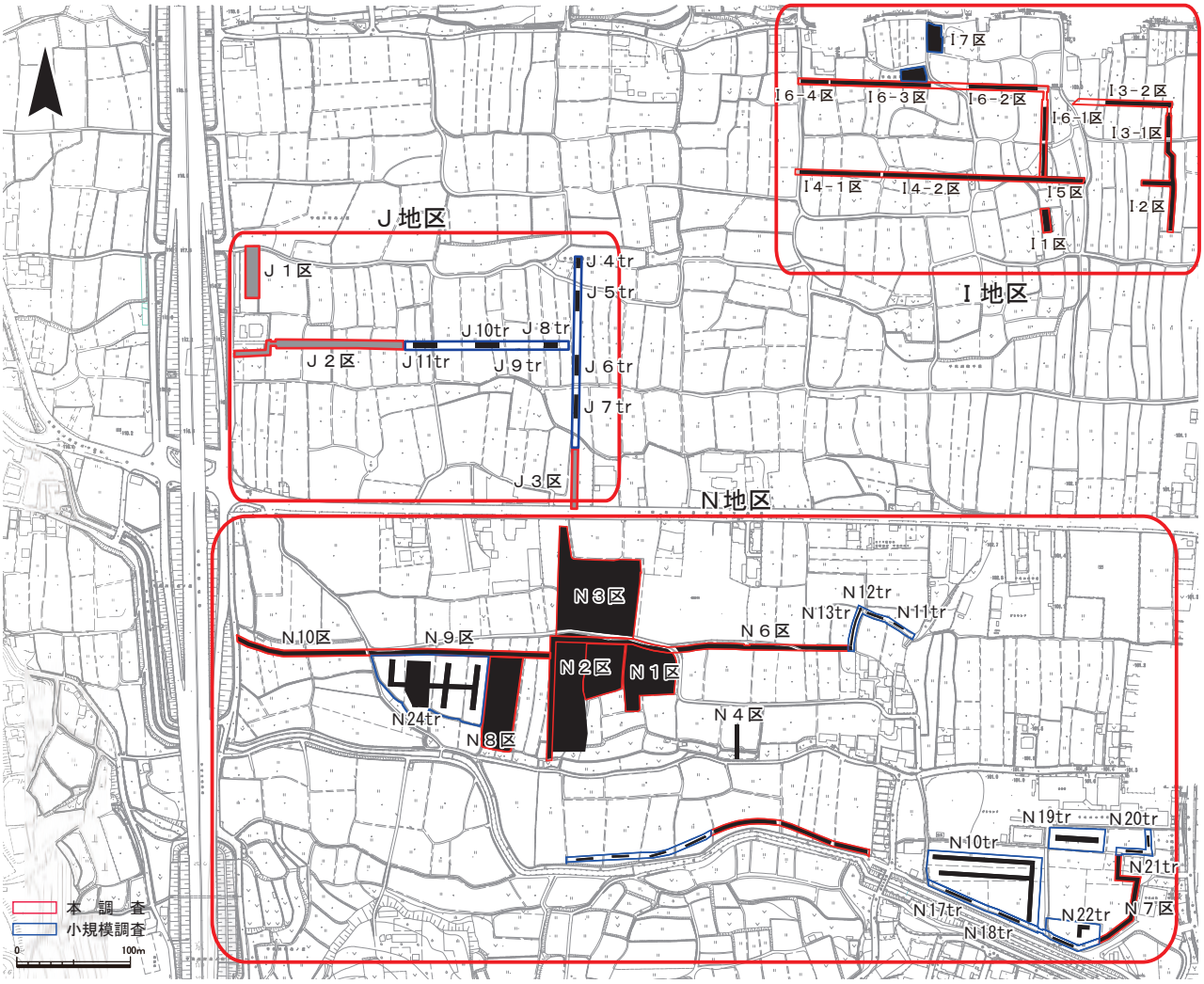


図２　千代川遺跡第38次調査区配置図

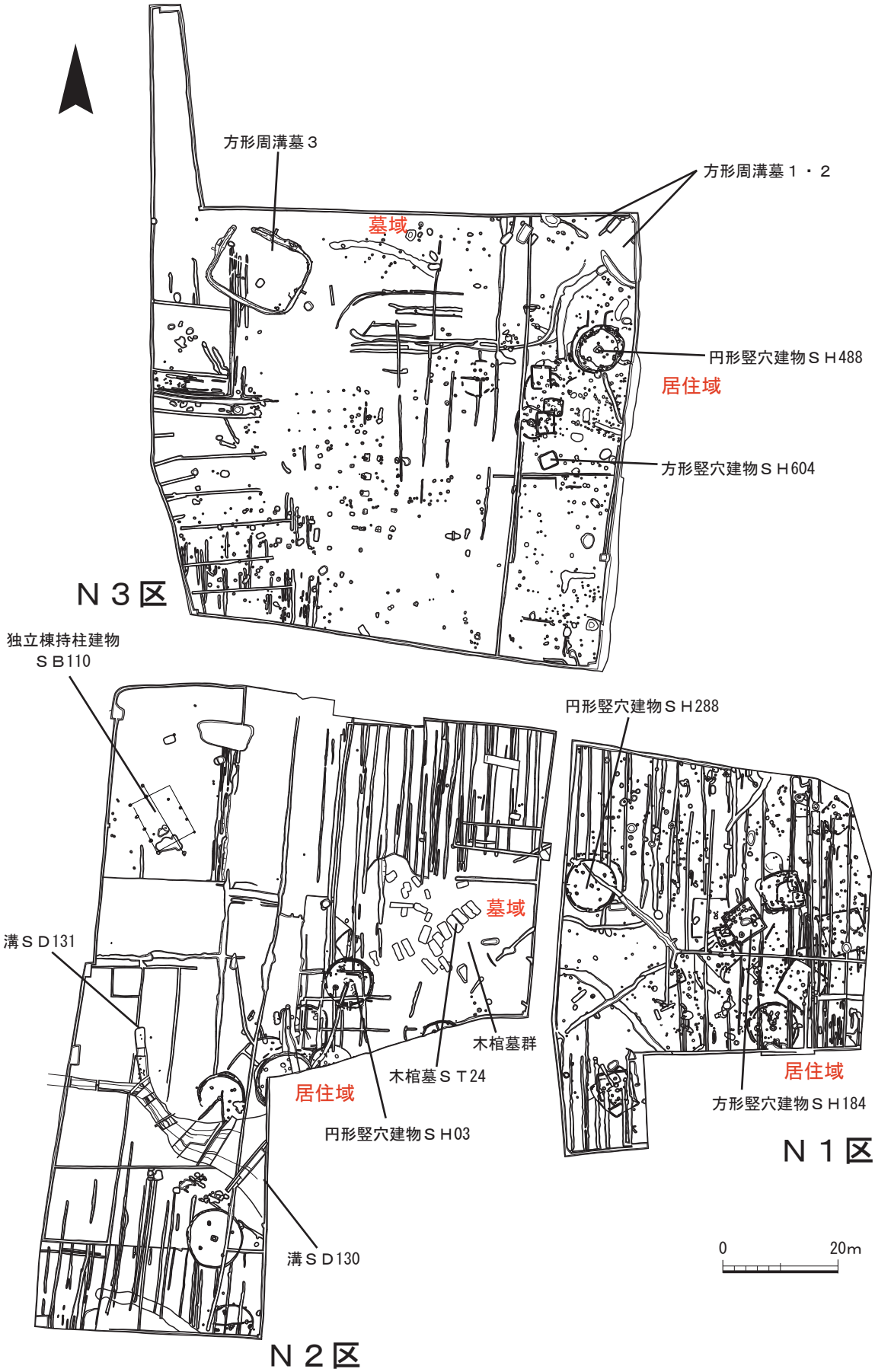


図３　Ｎ１・２・３区平面図(1/1,000)

（１）竪穴建物

竪穴建物が集まる居住域とみられる箇所をＮ１区、Ｎ２区、Ｎ３区、Ｎ６区で確認しました。41棟の竪穴建物の内、時期が分かるものは、弥生時代中期後半から中期末の時期が14棟、後期前葉の時期が10棟、後期中頃から後半の時期は７棟でした。検出した竪穴建物は、大きく３つのタイプに分けることができると考えられます。

タイプ１　直径５～８ｍ程度の円形の竪穴建物（写真１）

比較的大きな竪穴建物で、中央に大きな土坑（どこう）を持ちます。柱穴（はしらあな）も確認でき、４本の柱穴を持つものや、周壁溝（しゅうへきこう）の周りに柱穴を持つものがあります。周壁溝が何重にもなるものが多く、建物を拡張するために何度も建て替えをしていることが分かります。排水溝として使っていたと考えられる溝を持つものもあります。



写真１　タイプ１の竪穴建物（ＳＨ288）



写真２　タイプ２の竪穴建物（ＳＨ184）

タイプ２　一辺が５ｍ程度の方形の竪穴建物（写真２）

標準的なサイズの竪穴建物で、床面中央に土坑を持ち、柱穴を４本持つものが多いです。このタイプの竪穴建物はＮ１区の調査区中央部で多く検出しました。



写真３　タイプ３の竪穴建物（ＳＨ604）

タイプ３　一辺が３ｍ未満の方形の竪穴建物（写真３）

Ｎ３区の東側で検出された小さな竪穴建物です。人が二人入れる程度の大きさです。周壁溝と床面とみられる面が確認されるのみで、柱穴や中央の土坑等は確認できませんでした。弥生時代中期末ごろの土器が出土しました。

（２）方形周溝墓

Ｎ３区では、方形周溝墓１～３を確認しました。方形周溝墓とは、方形の区画の周囲に溝を掘り、溝を掘った土で低く盛土を行い、木棺などの埋葬施設を設置する弥生時代のお墓です。今回の調査では、溝の内側で埋葬施設はすでに削られており、確認することはできませんでした。

①方形周溝墓１・２

調査区の北東部で周溝の一部を検出しました。１辺の溝を共有し、隅の部分で溝が途切れています。

方形周溝墓２の南辺の溝からは、弥生土器が多数出土しています。複数個体の壺や甕が重なるように溝に入った状態で出土しました（写真４・５）。土器の形から、弥生時代中期後葉に営まれたとみられます。

②方形周溝墓３

東西13m・南北11mを測る周溝の全周を検出しました（写真８）。北西隅部が掘り残されており、 陸橋部（通路）だったようです。

周溝内からは、土器が多量に出土しています。溝の上層と下層で土器の出土状況が異なっており、上層では土器の小片でまとまりをもって出土するのに対し、下層では壺や甕が形を保ったまま出土しており、溝に入るまでの経緯には違いがあるとみられます（写真６・７）。出土した土器は、弥生時代中期後葉でも新しい傾向を示し、方形周溝墓１・２の後に造られたと考えられます。



写真４　方形周溝墓２溝内上層土器出土状況



写真５　方形周溝墓２溝内下層土器出土状況



写真６　方形周溝墓３溝内上層土器出土状況



写真７　方形周溝墓３溝内下層土器出土状況

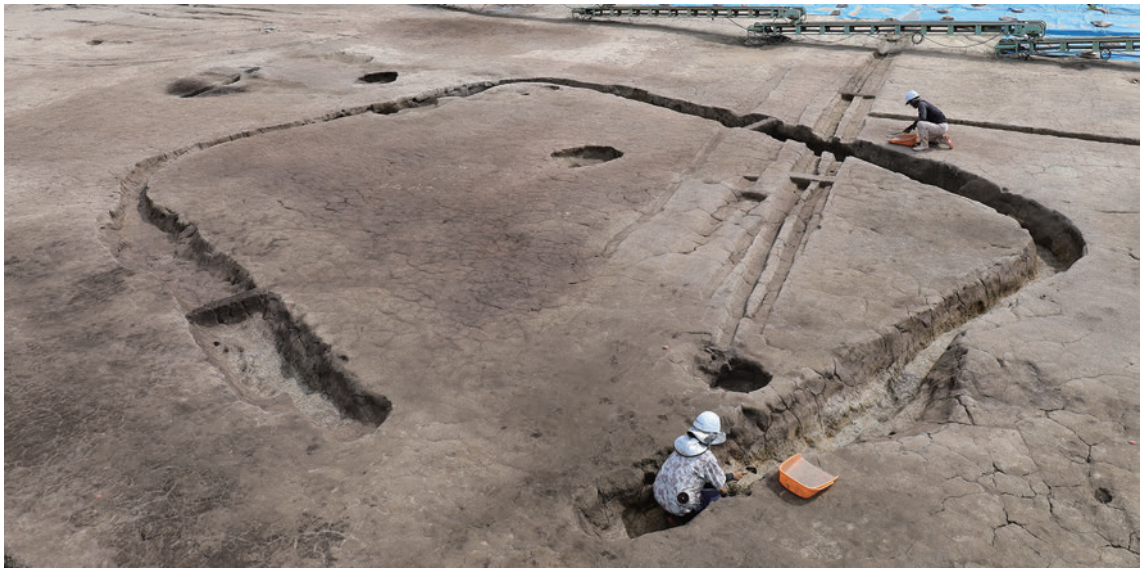


写真８　方形周溝墓３全景(北から)

(３)木棺墓群

Ｎ２区で23基の木棺墓を確認しました(写真９)。Ｎ１区とＮ２区の竪穴建物が集まる区域(居住域)の間の少し標高の低い位置で密集して検出しました。木棺墓群の周りを区画するような溝は検出していません。23基の木棺墓は、墓壙(ぼこう)の大きさから、長軸２ｍのものと、長軸が１ｍのものに分けられます。

長軸が２ｍのものは、向きをそろえて北東から南西方向にほとんど直線的に並んでいます。対して、長軸が１ｍほどの小さなものは、向きは揃わず、木棺墓群の北側に集まっています。どちらの墓壙でも､木棺の痕跡を確認しています。墓壙からの出土遺物は少なく、詳細な時期の特定は困難ですが、出土した土器片は弥生時代中期のものとみられます。

これまでの千代川遺跡の調査例や周辺の遺跡では、溝で取り囲んで墳丘の範囲をはっきり示す方形周溝墓が多く、今回も調査区北側で方形周溝墓を検出しています。近接した時期や立地にもかかわらず墓制(ぼせい)に違いがみられるのはなぜか、今後の課題となります。

(４)その他遺構

独立棟持柱建物(ＳＢ110)　Ｎ２区の北西側では、梁行３間・桁行２間の独立棟持柱建物を検出しました(写真12)。遺存状況が悪く、柱穴等が浅く残存する程度で出土遺物はありません。検出した調査区の北西側は南側よりも地形がやや高くなっており、居住域や木棺墓群とは離れた位置にあります。

溝(ＳＤ130・131)　Ｎ２区の調査区南西部では、大きな溝ＳＤ130・131を検出しました(写真13)。中期後葉には溝が掘削され、部分的に埋没したのち、後期前葉ころに再掘削が行われたとみられます。北西から南東に向かって深くなっており、溝が深くなる南西部



写真９　木棺墓群検出状況（南東から）



写真10　木棺墓検出状況



写真11　木棺墓完掘状況



写真12　独立棟持柱建物（ＳＢ110）全景（南東から）



写真13　溝（ＳＤ130・131）全景（東から）

では、ＳＤ130と131はほとんど重なっており、幅6.5m、深さ1.2mにもなります。溝からは、弥生時代中期後葉の時期の赤く彩色された土器の破片、搬入品とみられる土器などが出土しています。

４．千代川遺跡の磨製石器

今回の調査範囲からは、弥生土器以外に多数の石器が出土しました。出土した石器には、武器の石鏃と石剣、農工具の石包丁、砥石、石斧などがあります。このうち、打製の石鏃と石斧を除く、磨製石鏃、磨製石剣、石包丁、砥石などが粘板岩で製作されています。近隣の山には、現在も砥石の材料として使われる良質な粘板岩が産出します。

Ｎ１・２・３・６区からは、製作する際に出た粘板岩の薄い剝片や、製作途中とみられる破片が出土しており、各居住域で石器が製作されていたと考えられます。今後、出土した地点と共伴する土器などを詳細に検討することにより、製作の時期や工程などが明らかにできると思いますが、ここでは、どのようなものが出土しているかの紹介にとどめたいと思います。

（１）磨製石鏃

磨製石鏃は、茎のあるもの（有茎式）とないもの（無茎式）が出土しています。

無茎式のものでは、製作の工程が想定できる製作途中の品や、失敗品が見つかっています。これらから、まだ検討段階ですが、石鏃は次のようなステップで作られたとみられます。

①　作りたい石鏃のサイズになるように石を割る（写真14　1-１）。

②　表面を平滑にする（写真14　1-２）。

③　側縁に刃をつけるために厚みを薄くする（写真14　1-３）。

④　端部分を研ぎだして刃をつける（写真14　1-４）。

有茎式の磨製石鏃は、４cm程度の小さなものと、 鏑がついた７cmを超える大きなものの２タイプが出土しました。鏑がついた大きなものは、同じ亀岡地域の弥生時代前期から中期の環濠集落として知られる太田遺跡で出土したものと似ています。

多数出土した磨製石鏃の中には、鏃身部の中心に一つの孔が穿かれた有孔磨製石鏃が３点あります（写真14　２～４）。千代川遺跡では、これまでの調査でも１点出土しています。孔の空いた石鏃自体は長野県を中心とした東日本でよくみられるもので、近畿地方では滋賀県を中心に分布します。近江地域で製作されるような土器とも共伴することから、近江地域との交流を示すものではないかと考えられます。

（２）磨製石剣

出土した石剣は、基部が折れてるなど一部が欠けており、完形のものはありません。Ｎ２区で出土した石剣（写真14の５）を観察すると、研磨の向きが変わっている箇所があります。石剣が折れるなどしたために、研ぎなおして剣先を整えるなどといった再加工がなされた可能性があります。



１－1～４　無茎石鏃の製作工程資料、２～４　有孔磨製石鏃、５　石剣

写真14　磨製石鏃と磨製石剣

（３）石庖丁

石包丁の未成品として粘板岩を薄く剥いだ素材を加工したもの（写真15の６）が出土しています。これから、 砥石で研磨して、写真15の７のような石包丁に加工したと考えられます。６のような石包丁を製作するのに丁度良い大きさの剥片以外に、製作途中で小さく割れてしまったと思われるものも含めて、様々な大きさの薄い粘板岩の剥片が出土しています。

（４）砥石

いくつかの竪穴建物の床面近くから砥石が出土しました。目が細かいもの（写真15の８）と粗いものがあり、用途などによる使い分けがあったようです。

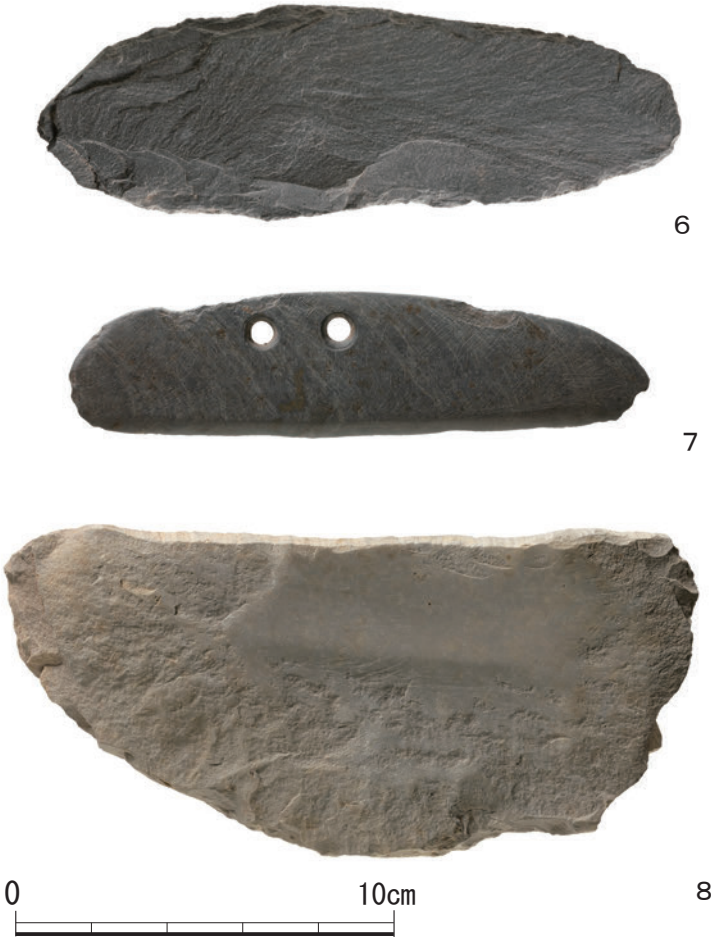


写真15　石包丁未成品、石包丁、砥石（上から）

５．おわりに

今回の調査では、台地の上に南北180ｍ以上、東西120ｍ以上の範囲で、弥生時代中期後葉から後期にかけての大型の集落遺跡（拠点集落）が広がっていたことがわかりました。集落には、４つの居住域と２つの墓域が営まれていました。居住域には、円形、方形、小型の竪穴建物に加えて、やや離れて独立棟持柱建物があり、方形周溝墓群と土壙墓群と形態の異なる墓から墓域が構成されていました。集落内では、付近から産出する良質の粘板岩を用いた磨製石器の生産が盛んに行われていました。河内や近江地域からの搬入品とみられる土器が出土したことから、石器を媒介とした他地域との交流も考えられます。以上のように、亀岡盆地の拠点的な集落の一つの姿が明らかになりつつあるのが大きな成果と言えます。

今後、出土遺物の整理を進める中で、各種遺構の営まれた時期や性格を明らかにし、南丹市池上遺跡、亀岡市時塚遺跡、同太田遺跡など周辺の遺跡や他地域の遺跡との比較を行いながら、千代川遺跡の位置づけを考えていくことを課題とします。

参考文献

亀岡市 2000『新修亀岡市史　資料編第一巻』

竹村亮仁 2026「京都府亀岡市千代川遺跡の概要―今後の検討課題の抽出―」古代学研究会４月例会発表資料

春名英行 2026「亀岡市千代川遺跡群の調査－弥生時代中後期の集落の新発見－」近畿弥生の会研究資料　第 29 回集会（滋賀場所）発表要旨・論考集

京埋セミナー資料N o.161-497

京都市溝路遺跡の発掘調査

－長岡京の北辺を考える－

（公財）京都市埋蔵文化財研究所調査課　中谷正和

１．はじめに

溝路遺跡は京都市南区久世殿城町地内に所在する遺跡です。遺跡は京都盆地西部の桂川右岸域にあり、西に向日丘陵・段丘と扇状地、東に桂川を望む、標高約17mの沖積低地上に立地しています。都市計画道路向日町上鳥羽線及び牛ケ瀬馬場線道路整備工事に伴い令和６年度から発掘調査を実施しています。初年度の調査では、長岡京の北限と考えられている北京極大路よりも北側で、京内から連続する長岡京期の道路と、それに隣接する建物群が発見されました(図３)。

２．長岡京とは

長岡京は、延暦３(784)年11月に桓武天皇の命によって奈良の平城京から遷された都です。延暦13(794)年10月に平安京に遷都するまで日本の首都として機能していました。都の範囲は、桂川と西山丘陵に挟まれた東西約4.3km、南北約5.2kmにおよぶと考えられています。政治の中心である大極殿や朝堂院などがある長岡宮は、現在の向日市域に造営されました。その周囲には、南北・東西の道路(大路)を碁盤の目状に組み合わせて方格の街区が形成されており、その街区内は幅約９ｍの道路(小路)で東西４つ・南北４つの計16の町(宅地)に分割されていました(図１)。

３．長岡京期の遺構

調査では、道路側溝や宅地内の溝、掘立柱建物などが発見されました(図３)。

道路側溝には、東二坊坊間小路東側溝の北延長にあたる溝20・102と、それに直交する、北京極大路の１町北にある東西道路(以下、「北京極大路北１町道路」と呼びます。)の側溝である溝34・40があります。

溝20・102は、長岡京左京646次調査で発見された東二坊坊間小路東側溝（ＳＤ64602の）延長線上に位置しています。また、北京極大路北１町道路側溝である溝34・40の間の距離は約9.4ｍあります。この幅は長岡京の小路規模の道路幅とほぼ同じ規模となります。

今回確認された北京極大路北１町道路と北京極大路との間の距離は約123ｍあります。それに対して北京極大路から北一条条間南小路も約123ｍあり、両者の値はほぼ同じです。今回確認された北京極大路北１町道路と北京極大路の道路幅だけでなく、北京極大路を挟んだ北１町・南１町の街区規模がほぼ同じ規格であることから、今回の調査地には京域と同等の区画が存在したと評価できます（図４）。

建物は、建物56・63・163・248の４棟があります。また、柱列53・237も建物の西柱筋となる可能性があります（図３）。柱穴の形態や規模から、建物163・248と柱列237のグループと建物56・63と柱列53・221のグループに分けることができます。

建物163・248と柱列237のグループは、柱穴が平面方形で、径が0.6～0.9ｍあります。建物56・63と柱列53・221のグループは、柱穴は平面隅丸方形で、径が0.3～0.5ｍあります。それぞれの柱穴から出土した遺物には、明確な時期差はありませんが、柱列237と柱列53の重複関係から、柱列53が新しいことがわかりました。各グループの違いは時期差を示しており、建物163・248と柱列237のグループが古く、建物56・63と柱列53・221のグループが新しい段階の建物・柱列となる可能性が想定できます。

４．長岡京期の遺物

土師器や須恵器などの土器類だけでなく、平城宮式の軒瓦などの瓦類、凝灰岩製の建築部材などが出土しました（図５）。瓦類は、溝20と溝34・40の交差点周辺から出土しています（図６）。北京極大路北１町道路より北側の区画に、瓦を用いる建物がある宅地が存在したと考えられます。また、凝灰岩の建築部材は、建物163内にある柱穴から出土しました。出土数が１点であるため建物163に伴う部材ではなく、近辺に凝灰岩を用いた施設が存在した可能性が考えられます。

５．おわりに

これまでの発掘調査によって、長岡宮・京の北方では、これと連続する可能性が高い道路の存在が報告されています（梅本2010・2014、黒須2020）。また、長岡京の北西部には旧流路があり、その右岸域の上久世遺跡以南では、建物跡などの遺構が複数個所で確認されています（上村1989）。

さらに、大藪遺跡内にあたる、北京極大路から北に約３町の旧流路内において、人面墨書土器やミニチュアカマド・ナベ、土馬や人形などが出土しました。長岡京南東部の水垂遺跡や、同南西部の西山田遺跡、北西部の古城遺跡でも、流路に祭祀具が投棄されています。これらは京域境界で執り行われた祭祀跡であり、当時の京域の隅に相当すると推

定されています(中島2024)。

今回の調査結果は、北京極大路から少なくとも1町北までは、長岡京左京の北方域と同じ規格をもつ道路や方格地割が京内から連続しており、方格地割内に宅地が存在したことを示すものでした。大藪遺跡で出土した人面墨書土器やミニチュア土器、土馬や人形を伴う祭祀跡などと合わせて考えると、当時は北京極大路よりも北まで実質的な京域がおよんでいた可能性があります(図7)。

参考文献（五十音順）

上村和直 1989「長岡京左京一条三坊跡」『長岡京跡・大藪遺跡発掘調査概報　昭和63年度』（財）京都市埋蔵文化財研究所

梅本康広 2010「長岡京」『古代の都3 恒久の都平安京』吉川弘文館

梅本康広 2014「長岡京の条坊施工範囲と造営計画」『平成24年度 公益財団法人向日市埋蔵文化財センター年報都城25』（公財）向日市埋蔵文化財センター

梅本康広･中島信親･田原葉月 2024「野田遺跡第13次調査（3NDDND-16地区）」『長岡京連絡協議会』№25-2（公財）向日市埋蔵文化財センター

梅本康広・田原葉月 2025「長岡京左京694次調査（7ANDND-15地区～北京極大路、東二坊坊間小路～発掘調査報告）」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第130集（公財）向日市埋蔵文化財センター

國下多美樹 2007「長岡京 ―伝統と変革の都城―」『都城 ―古代日本のシンボリズム』 青木書店

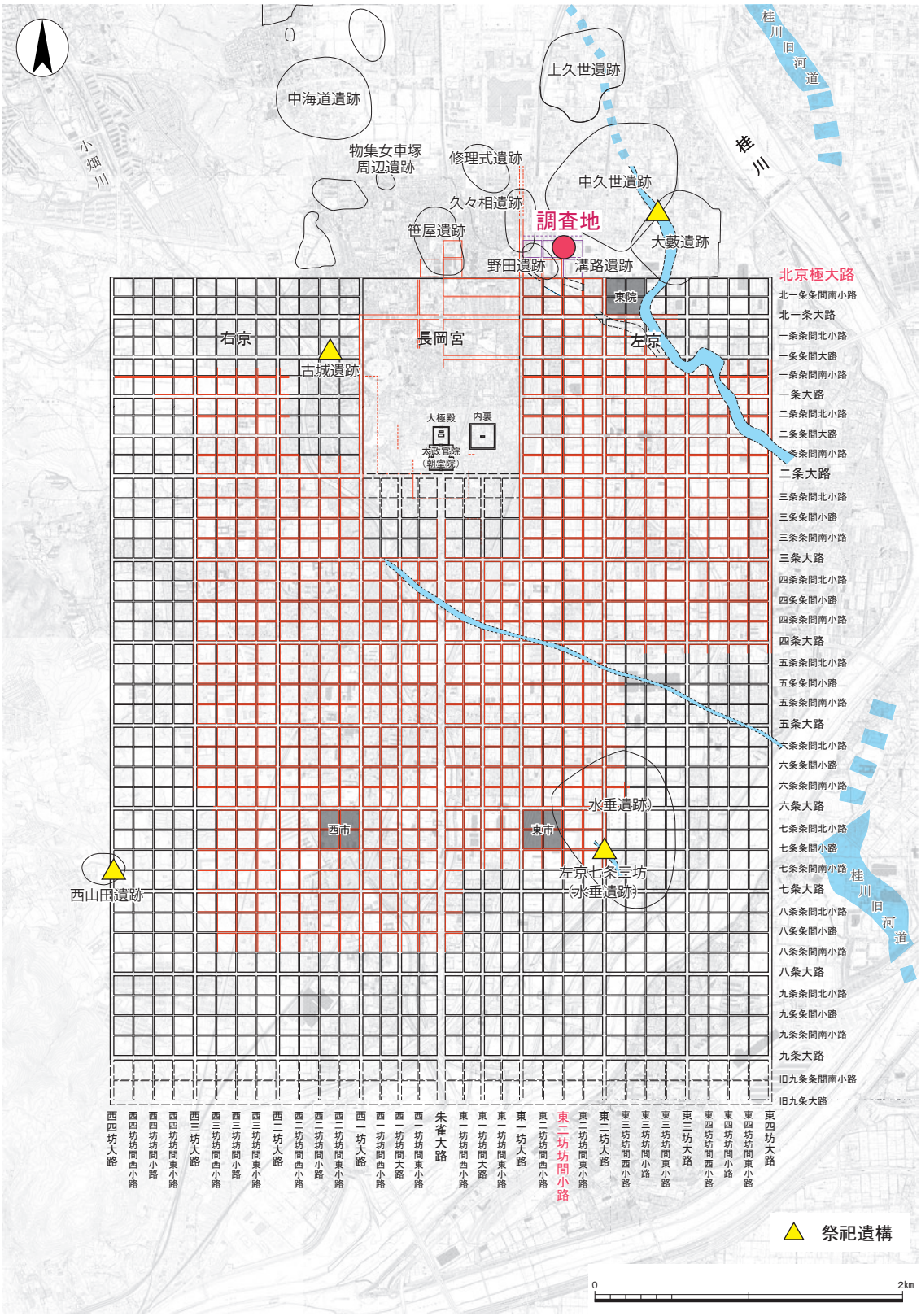
國下多美樹 2020「都の北に何があったか ―方格地割都市プランの拡大―」『難波宮と古代都城』同成社

黒須亜希子 2020「大藪遺跡（18S738）」『京都市内遺跡詳細分布調査報告』令和元年度　京都市文化市民局

中島信親 1999「長岡京条坊図」『平成9年度財団法人向日市文化財センター年報　都城10』（財）向日市文化財センター

中島信親 2024「長岡京の祭祀遺物」『東アジア都城と宗教空間』京都大学学術出版会

山中　章 1997『日本古代都城の研究』柏書房



＊長岡京条坊復元案(黒線;山中1997、中島1999)に、長岡京条坊完成度(赤線;國下2007)を合成。

図１　調査地位置図(1：40,000)

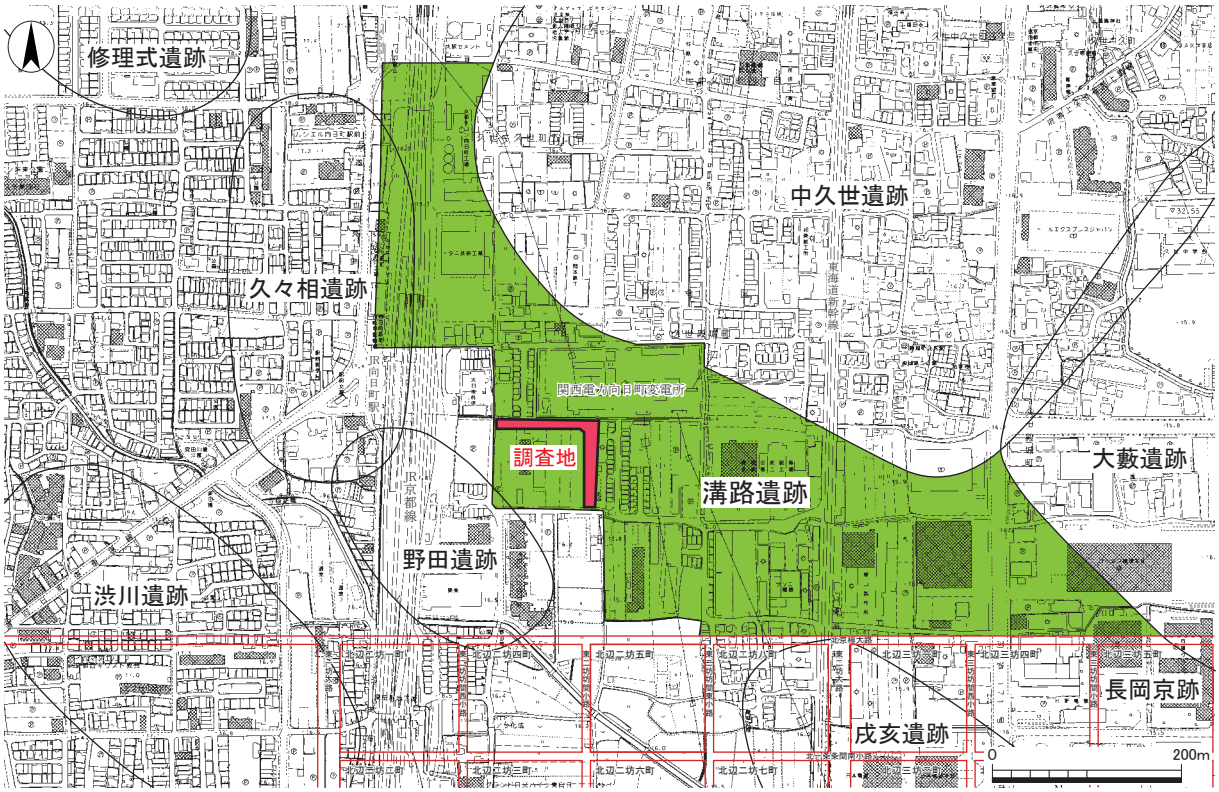


図２　調査地位置図（１：8,000）　2025年３月現在の遺跡範囲による



図３　調査区遺構平面図［長岡京期］（１：800）

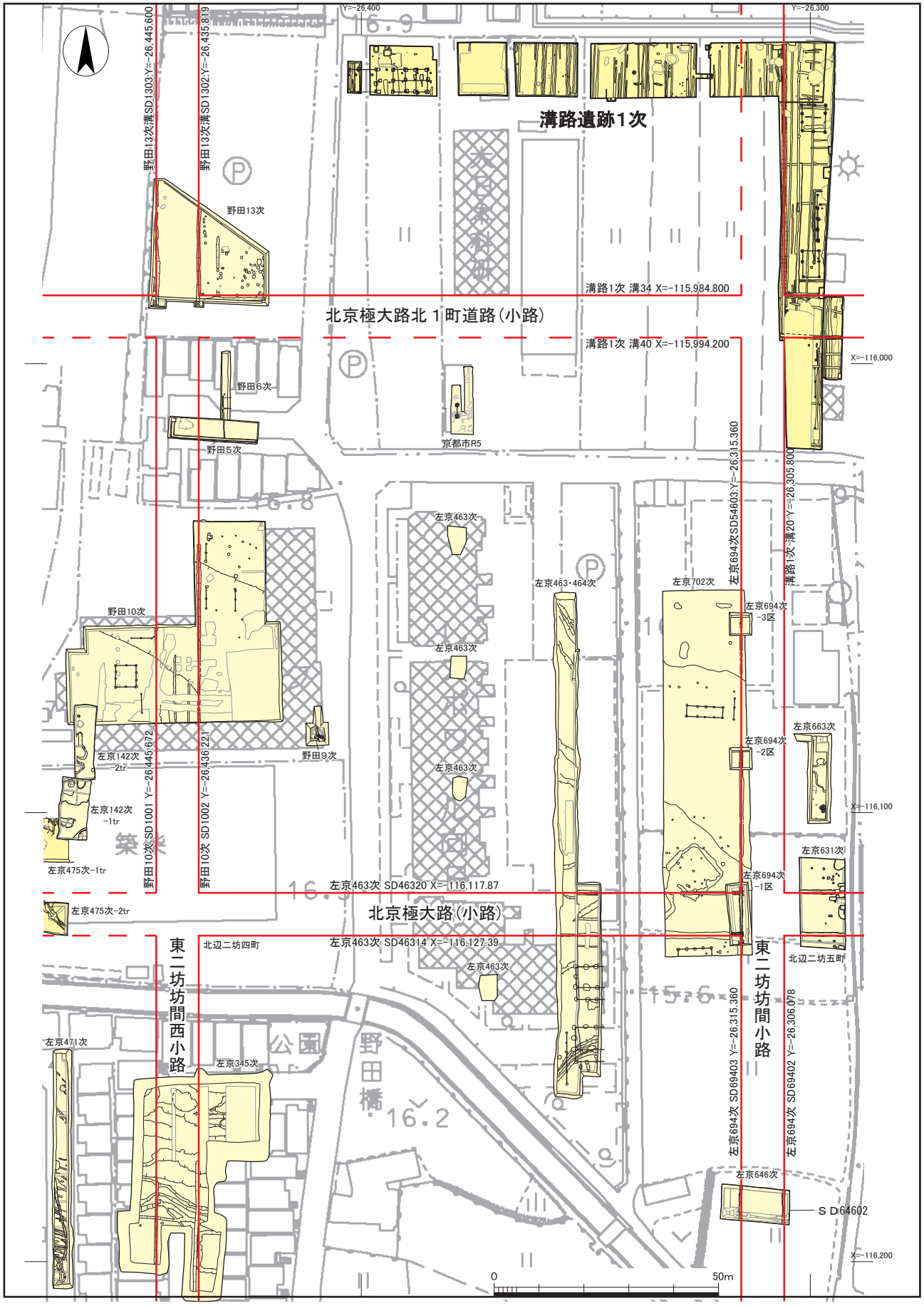
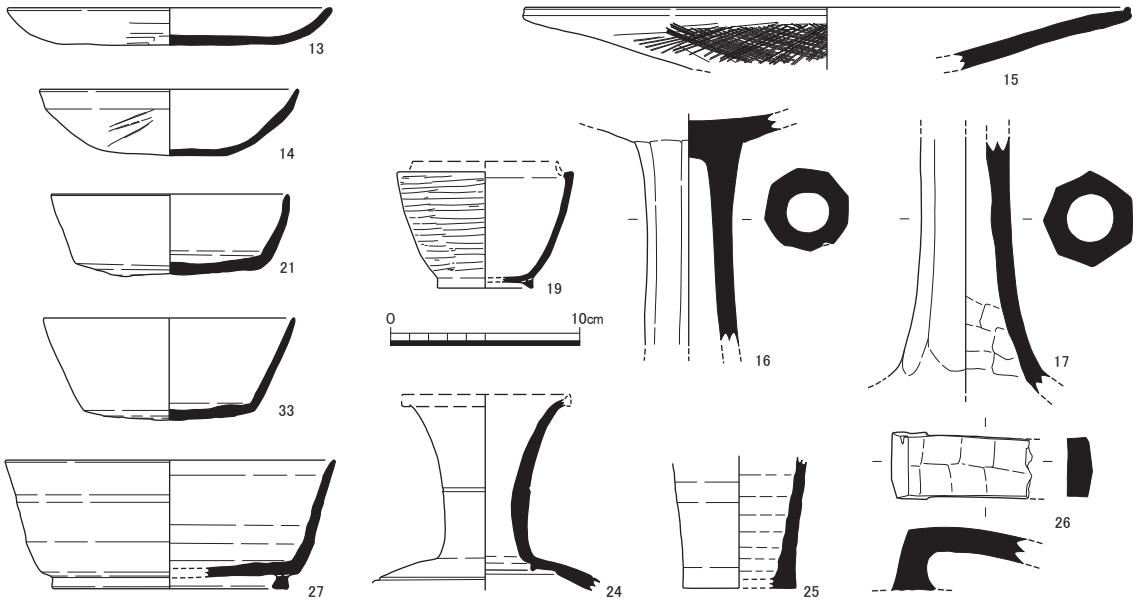
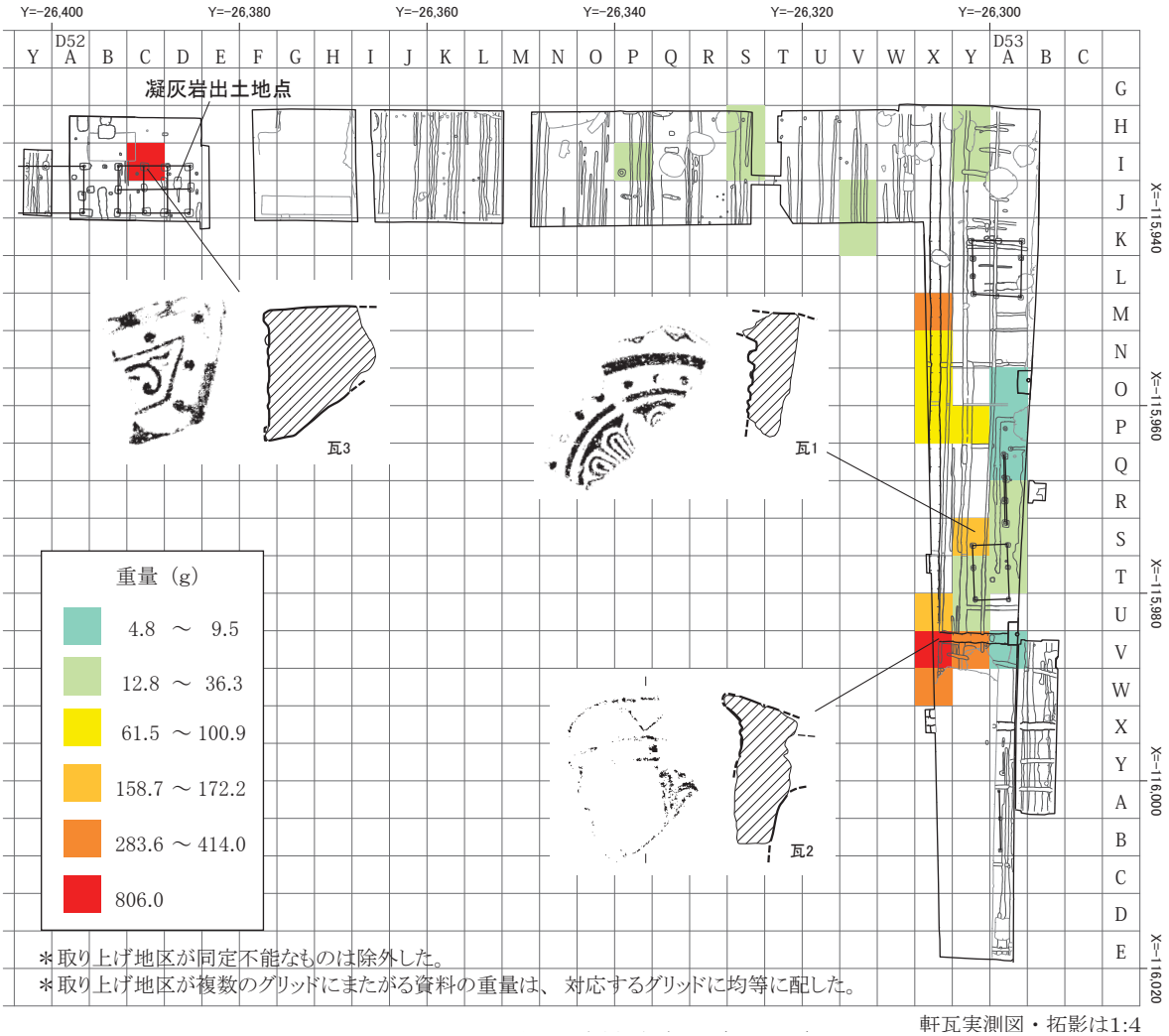


図４　溝路遺跡周辺の道路側溝（１：1,200）



溝34：27、溝40：33、それ以外は溝20

図５　溝20・34・40出土土器実測図（１：４）



＊取り上げ地区が同定不能なものは除外した。
＊取り上げ地区が複数のグリッドにまたがる資料の重量は、対応するグリッドに均等に配した。

軒瓦実測図・拓影は1:4

図６　出土瓦重量分布図（１：800）

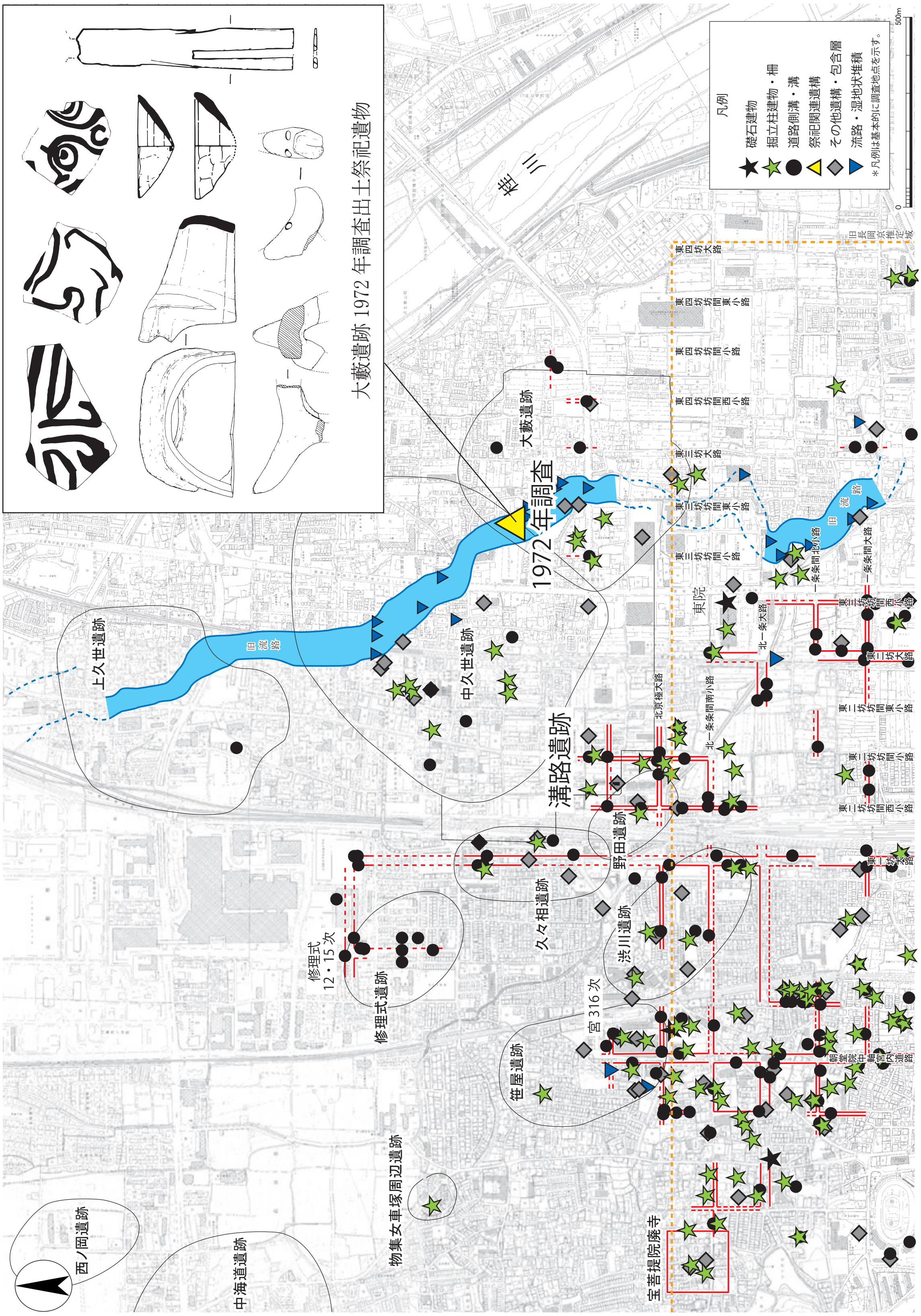


図７　長岡京北方における飛鳥～平安時代初頭の遺構（１：400）

京埋セミナー資料N o.161-498

舞鶴市女布（にょう）遺跡の発掘調査

－中世墓の構造と副葬品－

京都府教育庁指導部文化財保護課　濵　喜和子

１．女布遺跡の概要

女布遺跡は、西舞鶴の市街地から南西約３kmに位置します（図１）。第13次調査は、府営農業競争力強化農地整備事業に伴い、京都府教育委員会が現在の女布集落に近い農地を対象として実施しました（図２）。

これまでの調査では、弥生時代から飛鳥奈良時代、および平安時代から中世にかけての遺構遺物が確認されています。

奈良時代には、女布遺跡の周辺は加佐（かさ）郡田辺（たなべ）（田造）郷に属していたと考えられます。第３次調査では、倉庫を含む掘立柱建物群が確認されており、これらは地方官衙に関わる遺構の可能性があります。このことから、奈良時代の女布遺跡はこの地域で中心的な位置を占めていたと想定されています。

その後、平安時代末になると、丹後国は平清盛（たいらのきよもり）の知行国となります。治承（じしょう）４（1180）年の源頼政の挙兵に始まる源平の争乱を経て、平家は元暦２（1185）年に壇ノ浦（だんのうら）で滅亡し、源頼朝が守護（しゅご）・地頭（じとう）の設置を認められると、加佐郡にも東国御家人が地頭として領地に入ってきます。

女布遺跡の属した田辺郷（たなべごう）については、いくつかの史料から、その支配関係の変化をたどることができます。元暦２（1185）年５月の丹後国司庁宣（ちょうせん）（命令書）は、この段階で国衙（こくが）の支配が及んでいたことを示します。一方、『吾妻鏡（あずまかがみ）』建久（けんきゅう）５（1194）年10月条には、源義朝（みなもとのよしとも）に仕えた鎌田正清（かまたまさきよ）の息女（そくじょ）が源頼朝（みなもとよりとも）によって当地の地頭職を得たことがみえ、荘園化の進展をうかがわせます。さらに、弘安元年（1278）の六波羅下知状（ろくはらげちじょう）（命令文書）によれば、田辺郷は寛喜（かんぎ）年間（1229～1232）頃には地頭請所となっていました。このように田辺郷では、承久３（1221）年の承久の乱以後、西日本各地に新補地頭が設置されるより前から、関東御家人の勢力が及んでいた点が注目されます。

今回取り上げる女布遺跡の木棺墓は、地頭請所が史料にあらわれる段階よりも前、12世紀末から13世紀初頭に営まれたものです。この時期は、田辺郷において荘園化が進み、関東御家人の勢力が及び始めていた時期にあたります。



図１　女布遺跡周辺の遺跡分布図（1/25,000）



図２　女布遺跡調査範囲(1/4,000)

中世の遺跡をみると、女布遺跡の東側に満願寺跡があります。満願寺は建保年間(1213～1219)に僧弁円によって創建されたと伝わり、本尊の木造十一面観音坐像(府指定有形文化財)には建保６(1218)年の銘が残ります。満願寺はその後、火災による焼失と再建を繰り返していたことが、(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センターの調査で明らかとなっています。最終的に満願寺は、昭和 44(1969)年に現在の場所に移され、今日まで法灯が伝えられています。また、女布遺跡の南東には舞鶴市内でも最大級の山城である女布城跡が所在します。

２．木棺墓の検出と構造

今回の第13次調査地は、女布遺跡の南端に当たります。調査区の中央付近で板材と青磁椀の口縁の一部を確認し、木棺墓の存在を把握しました。埋葬の時期は、出土した青磁椀の年代から、鎌倉時代の12世紀後半から13世紀初頭と考えられます。棺の規模は、外法で長辺160cm・短辺60cmです。埋葬された人の頭の向きは北西と考えられます。上部は腐敗したためか、底板から約５cmの高さまでしか残っていませんでしたが、底板はほぼ完全



写真１　木棺墓検出状況(北西から)

な形で検出することができました。板材の樹種同定を行ったところ、すべてスギであることが判明しました。

底板の上には、板材が複数重なっていました。いずれも厚さ約５mmの薄い板です。腐敗して落ち込んだ棺蓋の一部と考えられます。木棺は、底板３枚、長側板２枚、小口板１枚の計６枚の板が残存していました。特筆されるのは、釘がまったく検出されなかった点です。側板小口板底板には、溝などで組み合わせた痕跡もなく、板を据えたうえで周囲を土で固定し、棺の形を保っていたものと考えられます(写真１)。また、棺の南西脇からは棺に沿って上下に重なるように丸太が２本出土しました。さらに、底板を取り上げると、その下から長さ約60cm・幅約10cmの板が３枚出土しました。

３．副葬品について

副葬品と考えられる遺物は青磁椀が１点です。この青磁椀は、中国浙江省(せっこうしょう)の龍泉窯(りゅうせんよう)で作られた非常に質のよい優品で、内面には片切り彫りで雲の文様が５つ施された飛雲文がみられます(写真２)。文様は流れるように美しく彫られているのが特徴です。雲は、日本だけでなく世界各地で神々の住まう場所とされてきました。とくに中国の思想では、雲は運気の動くところとされ、縁起のよい吉祥の文様として古くから大切にされてきました。飛

雲文は、そうした雲が尾を引いて飛ぶ様子をあらわした文様です。口縁部が少し欠け、器にはひびが入っていますが、これは意図的に欠いたものと考えられます。埋葬されるほど大切にされてきた椀の口縁部をあえて欠くという行為が鎌倉時代にも行われていたことが、ここ舞鶴市で確認できたことは貴重な成果です。同様の打ち欠きは、三重県桑名郡多度町の宮地中世墳墓群や大阪府貝塚市の橋本遺跡などの墓から出土した陶磁器でも確認されており、葬送儀礼の一つの作法であったと考えられます。



写真２　青磁椀出土状況

なお、舞鶴市から出土する同時代の青磁や白磁などは、中国で生産され日本へもたらされたものです。その搬入経路については、一度博多に入った陶磁器が日本海航路を通り、山陰沿岸から若狭湾方面へ運ばれた可能性が指摘されています。舞鶴市は日本海交通の結節点に位置することから、こうした海上交通を通じて陶磁器がもたらされた可能性が高いといえます。一方で、京都にも近いことから、都を経由して搬入された可能性も考慮する必要があります。

４．中世の墓と葬送

ここで、木棺墓の位置づけを考えるために、中世の墓と葬送について簡単に述べます。中世墓とは､おおむね鎌倉時代から安土桃山時代までに営まれた墓を指します。木棺とは、遺体を納めるために板を組み合わせて作った棺のことで、今日の棺桶（かんおけ）にあたるものです。

現在の日本の葬送はほぼ火葬ですが、中世には火葬以外にも複数の方法が行われていました。天文元（1532）年に成立した中世の百科事典『塵添壒嚢鈔（じんてんあいのうしょう）』は、「葬ノ事」に「上古ハ多ク土葬也」として古代には土葬が主流であったとしつつ、当時の葬送として水葬火葬土葬風葬の４種を挙げています。水葬は遺体を川に流す方法、風葬は遺体を野に置き、鳥や獣に食べられ、風雨に曝（さら）されて朽（く）ちるにまかせる方法で、比較的一般的に行われていたようです。このように文献史料からは、葬送が一様ではなく、複数の方法が併存していたことがわかります。

絵画資料からも中世の墓の様子を知ることができます。『餓鬼草子（がきぞうし）』（図３）に描かれる墓地には、土を盛った盛土塚や、石を積み上げた石積塚が見え、また墓の間には、棺に納



出典：東京国立博物館「餓鬼草紙」（A-10476）https://image.tnm.jp/image/1024/C0016937.jpg※画像を加工して使用

図３　『餓鬼草紙』（跋扈する餓鬼の姿）

められた屍や、何も施されない屍など、さまざまな状態で葬られた様子が描かれています。このように、鎌倉時代の葬送形態が多様であったことは、絵画資料からもうかがえます。

鎌倉時代の葬送の手順については、当時の葬送について細かく記した『吉事次第』からうかがうことができます。そこには亡くなると直ちに簀の上に北枕に寝かせ、屏風や几帳を立てめぐらし、少し離れた所に火をともして香を焚くことなどが記されています。納棺は６人ないし８人で行い、下に敷いた簀ごと棺に納め、遺体に覆いをかけ、棺内に土砂を入れて蓋をし、再び北枕にして葬送の時まで置いたとされます。

また、中世前期には、葬送は亡くなった当日に準備が整えられ、夜に近しい人々の手でひっそりと執り行われて、終わると同時に痕跡が片付けられました。こうした当時の葬送のあり方も踏まえながら、女布遺跡の木棺墓がどのような構造であったのか、また、どのような人物が埋葬されたのかを検討していきます。

５．女布遺跡の木棺墓の位置づけ

（１）府内の中世墓と輸入陶磁器

京都府内で中世墓と輸入陶磁器が伴って出土した例は26例あります（図４・表）。墓の構造をみると、26例のうち、木棺墓と判明しているものは６例、火葬墓は３例などとなっており、木棺墓に分類される例自体が少数です。女布遺跡のように板材が良好に遺存し、木棺の痕跡がここまで明瞭に残っている例は珍しいものといえます。

とくに注目されるのは、舞鶴市内では女布遺跡のほかに志高遺跡でも、12世紀末～13世紀初頭の青磁椀を副葬する墓（土壙墓）が確認されている点です。木棺墓と土壙墓という構造の違いはあるものの、同じ舞鶴市で、ほぼ同時期に青磁椀を副葬する埋葬が複数営まれ



図４　京都府内で輸入陶磁器が出土した中世墓分布図(1/750,000)

ていたことになります。年代の点でも、多くが13世紀に位置するなかで、女布遺跡の12世紀後半～13世紀初頭の時期は府内でも古い段階に位置づけられます。

(２)釘を用いない木棺墓と角材の検討

女布遺跡の木棺墓では釘が一切出土せず、木材を観察しても釘を打った痕跡は認められませんでした。木材を組み合わせる溝もないことから、板材を現地に持ち込み、盛土によって固定しながら組み立てたものと考えられます。後述するように持ち運べる棺の可能性

表　京都府内の輸入陶磁器を伴う中世墓一覧

番号	所在地	遺跡名	時代	種類	主な出土遺物
	舞鶴市字女布	女布遺跡	12 世紀後半～ 13 世紀初頭	木棺墓	青磁椀
1	京丹後市久美浜町浦明	日光寺遺跡	13 世紀	木棺墓	青磁椀、鉄製刀子、土師器皿
2	京丹後市網野町島津	林遺跡	13 世紀	土坑墓	青磁、土師器鍋、黒色土器椀、天聖元宝
3	京丹後市網野町島津	横枕遺跡（第１次）	13 世紀	不明	青磁椀、土師器皿
4	京丹後市大宮町河辺	松田遺跡	14 世紀代	木棺墓	青磁盤片、鉄釘
5	宮津市成相寺	成相寺古墓（C 地点）	13 ～ 14 世紀	火葬墓	青磁小壺、越前焼三耳壺、丹波焼壺 瀬戸焼瓶子、須恵器甕
6	舞鶴市字志高	志高遺跡	12 世紀末～ 13 世紀初頭	土坑墓	青磁碗
7	綾部市安国寺町平山	安国寺平山古墓	13 世紀	不明	青磁碗
8	福知山市石原上野	上野古墓	中世	土坑墓	青磁、土師器皿、陶器、釘、火葬骨
9	福知山市観音寺	観音寺遺跡	平安末	土坑墓	青磁碗、紙片
10	福知山市大内	山田館跡	13 世紀後半～ 14 世紀前半	土坑墓	青磁皿、土師器鍋、土師器皿
11	京都市中京区（仲保利町ほか）	平安京左京三条三坊十五町	室町時代	土坑墓	青磁碗、白磁小椀、瀬戸窯香炉、漆器椀 和鏡、宋／明銭、土師器皿
12	京都市中京区竹屋之町	平安京左京五条三坊十五町	鎌倉時代～室町時代	木棺墓	青磁碗、土師器皿
13	京都市左京区吉田本町	吉田本町遺跡	11 ～ 12 世紀	木棺墓	青磁椀、釘
14	京都市左京区吉田近衛町	白河街区跡吉田上大路町遺跡	14 世紀中頃～後半	木棺墓	青白磁水注蓋、土師器、緑釉陶器 須恵器、瓦器、焼締陶器、有孔塼、釘
15	長岡京市今里	長岡京跡右京第 653 次調査（今里遺跡）	鎌倉時代後半	土坑墓	青磁椀、土師器皿、瓦器椀、鉄鏃
16	長岡京市神足	長岡京跡右京第 781 次調査（神足遺跡）	13 世紀	土坑墓	青磁椀
17	長岡京市下海印寺伊賀寺	長岡京跡右京第 70 次調査（下海印寺遺跡）	13 世紀	土坑墓	青磁椀、土師器、瓦器
18	長岡京市井ノ内	井ノ内稲荷塚古墳（第８次）	13 世紀	土坑墓	青磁碗、瓦器
19	宇治市菟道西隼上り	西隼上り遺跡	13 世紀	土坑墓	青磁椀、漆器皿、須恵器皿、鉄釘
20	八幡市内里日向堂	内里八丁遺跡（第 20 次）	12 世紀末～ 13 世紀初頭	火葬墓	青磁椀、短刀、瓦器椀、土師器皿
21	八幡市八幡溝落・狐川	木津川河床遺跡	13 世紀	木棺墓	白磁椀、瓦器椀、土師器皿、鉄製品
22	京田辺市普賢寺小田垣内	小田垣内遺跡	14 世紀末～ 16 世紀中葉	火葬墓	青磁椀、瓦器羽釜、土師質羽釜 土師器皿、須恵器壺
23	相楽郡精華町下狛椋ノ木	椋ノ木遺跡	13 世紀	土坑墓	青磁椀、土師器小皿、漆器椀
24	相楽郡精華町南稲八妻森垣外	森垣外遺跡（第 2 次）	13 世紀	土坑墓	青磁椀、青磁皿、木製円盤
25	木津川市加茂町尻枝前椚	前椚中世墳墓群	13 世紀末～ 14 世紀後半	土坑墓	青磁椀、短刀、和鏡、土師器皿 漆製蔵骨箱
26	木津川市加茂町例幣	恭仁宮跡（第 11-1 次）	13 世紀前半	土坑墓	青磁椀、土師器皿

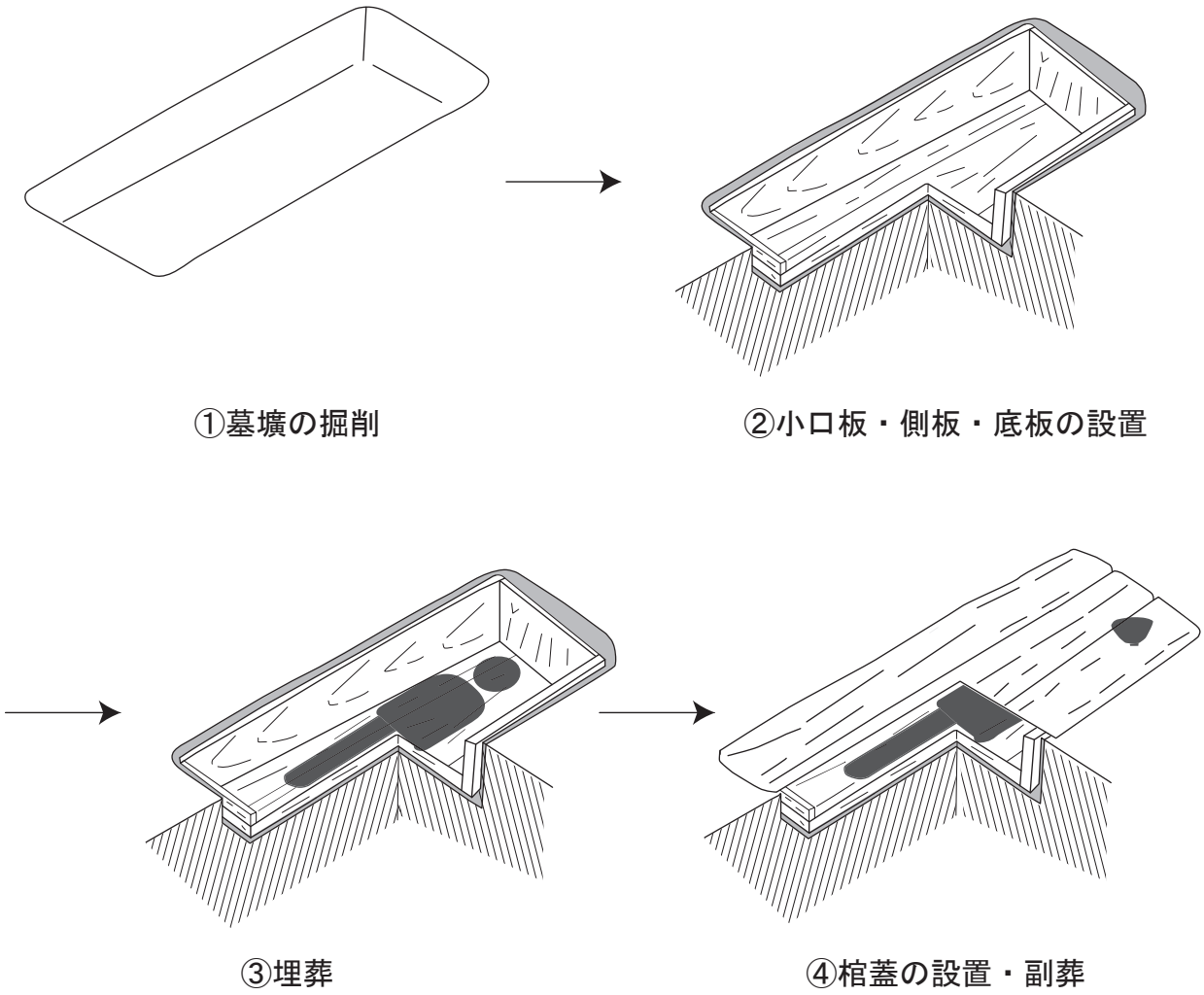


図５　木棺墓構築過程復元図

は否定できませんが、出土状況からは、次のような構築過程を復元できます(図５)。まず、検出された木棺よりひとまわり大きな長方形の墓壙を掘削し、底板を据えます。次いで小口板と側板を立て、遺体を安置します。最後に棺蓋をかぶせますが、この棺蓋の上に青磁椀が置かれていたことが出土状況から判明しました。このように、木棺墓の構築過程まで追うことができる点も、本遺構の大きな特徴といえます。

釘を用いない構造の木棺墓の例はいくつかありますが、なお明らかでない点も多く、類例との比較を通じて検討していく必要があります。とくに注目されるのが、木棺に沿うように据えられていた加工角材２本の存在です。類似する事例として、博多(はかた)遺跡群第26次調査が挙げられます(図６)。この調査では、木棺の横に置かれた角材は、副葬品ではないものの丁寧に加工され、折れも見られず、廃材とは考えにくいと報告されています。そして、土壙の底部に２本の丸太を据え、その上に直交させて木棺を置き、丸太と角材を神輿(みこし)のように組んで木棺を運ぶ際に用いた可能性が指摘されています。女布遺跡でも、釘や組み合

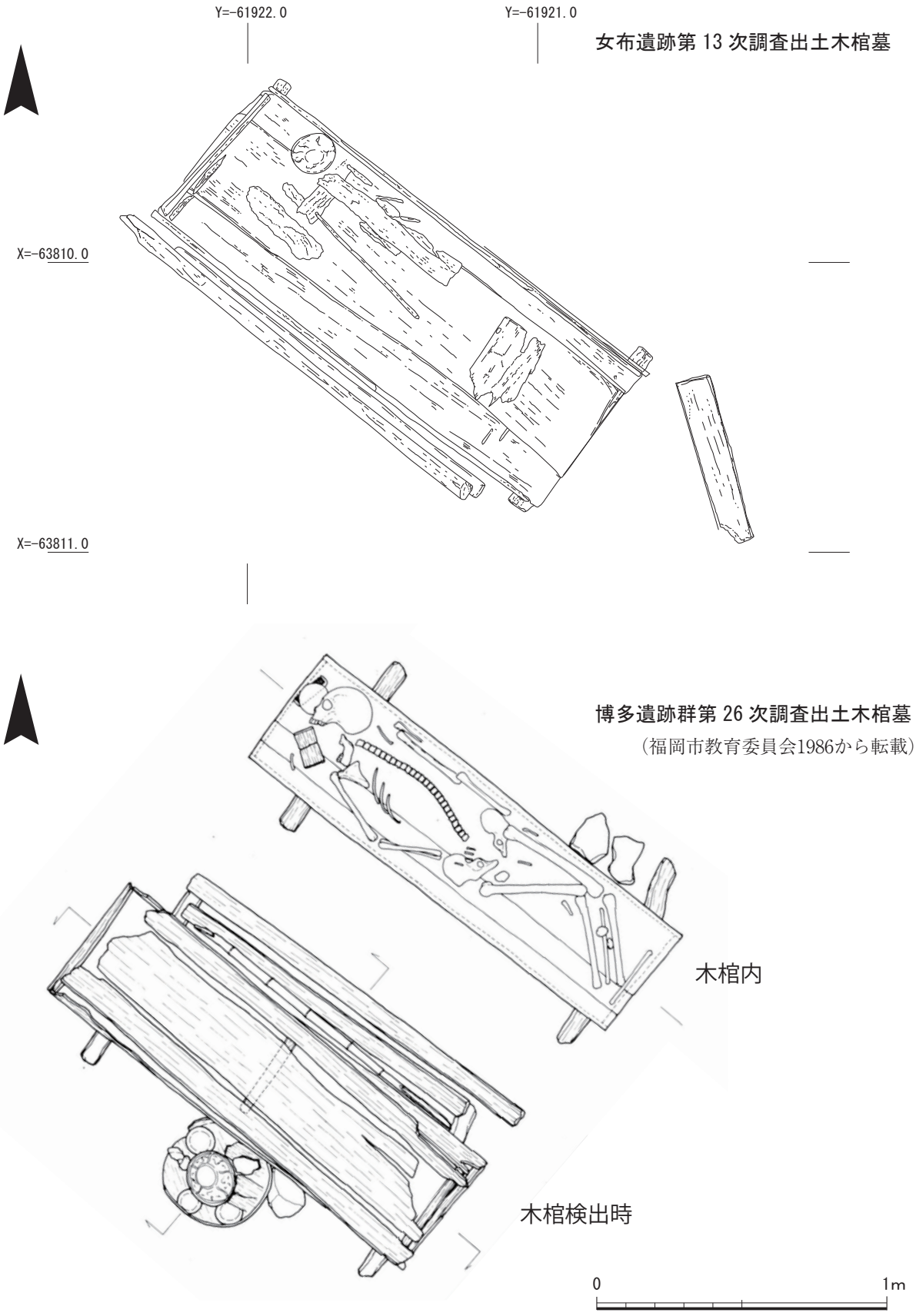


図６　女布遺跡出土木棺墓平面図と博多遺跡群第26次調査出土木棺平面図(1/20)

わせの溝がみられないことから、板材を紐(ひも)で縛(しば)って固定したとも考えられます。その場合、木棺に伴う角材や、底板の下から出土した３枚の板が、棺の結束や運搬に関わる部材であった可能性も否定できません。一方で、これらの板は厚さ約５mmと薄く、実際に運搬の荷重に耐えうるかは、慎重な検討を要します。木棺が現地で組み立てられたものか、あるいは運ばれてきたものか、また角材や下部の板がどのような機能をもっていたのかについては、部材の強度や使用痕の観察、全国の類例収集を通じて、引き続き検討していきたいと考えています。

（３）立地と被葬者像

女布遺跡では広い範囲で発掘調査を進めており、この木棺墓の比較的近い範囲からも中世の遺構が数多く確認されています。（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センターの第９次第11次調査では、木棺墓から北へ50mのところで中世の建物跡６棟が検出されています。つまりこの木棺墓は、もともと墓地として利用されていた場所に単独で造られたのではなく、人々が生活していた建物や集落に近い場所に営まれた可能性が高いと考えられます。中世には寺院墓地や共同墓地のように一定の場所へまとまって埋葬される事例が多く知られ、生活空間に近接して単独の木棺墓が築かれる状況は必ずしも一般的とはいえません。現時点の発掘調査成果からは、この木棺墓は集落と密接な関係をもつ埋葬であった可能性が考えられます。

こうした立地条件を踏まえると、被葬者像についても一定の検討が可能になります。集落近くの単独で造営されている墓は、土地の所有者やその土地を開発した領主、あるいは村落をまとめる有力者など、地域の指導的立場にあった人物の墓である可能性があります。女布遺跡の木棺墓についても、現時点で断定はできませんが、こうした可能性を視野に入れながら今後さらに検討を進めていきたいと考えています。

６．まとめ

今回の調査では、鎌倉時代の木棺墓が良好な状態で検出され、副葬品として龍泉窯の青磁椀１点が出土しました。釘を用いない構造や、木棺に伴う角材など、なお検討を要する点が多く残されていますが、木棺の遺存状態の良さ、青磁椀の打ち欠きにみる葬送儀礼、集落に近接する立地など、鎌倉時代の埋葬習俗と地域社会を考えるうえで重要な成果を得ることができました。

【参考文献】

勝田　至 2006『日本中世の墓と葬送』吉川弘文館
橘田正徳 1991「屋敷墓試論」『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会
太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡 XV―陶磁器分類編―』
舞鶴市 2002『女布遺跡第 3 次発掘調査概要報告書』（舞鶴市文化財調査報告書第 37 集）
舞鶴市 2026『田辺城跡第 35 次・女布遺跡第 15 次発掘調査報告書』（舞鶴市文化財調査報告書第 57 集）
舞鶴市史編さん委員会 1993『舞鶴市史』通史編（上）
福岡市教育委員会 1986『福岡市埋蔵文化財調査報告書 144：博多』
吉田奈稚子 2011「中世の葬送と供養観の展開」『三重大史学』第 11 号

京埋セミナー資料N o.161-499

京都市石見城跡の発掘調査
－幻の西岡の城を掘る－

京都市文化市民局文化芸術都市推進室
文化財保護課　黒須亜希子

1．はじめに

石見城跡は、西京区大原野石見町内に存在する中世の平城跡です。桂川・小畑川の流域にあたる西岡地域には、中世の在地土豪や国人が築いたとされる城館の推定地が多数残されており、石見城跡もその一つに数えられています。在地土豪の一人であった野田泰忠が、応仁の乱の戦果を記した『野田弾正忠泰忠軍忠状』には、文明２(1470)年に「石見館」を焼いたとする記述があり、これが現在、埋蔵文化財包蔵地である石見城跡として推定されています。石見町内には、城の土塁や堀を想起させるような凹凸が地表に現れている箇所があり、早くから城館跡として目されてきました。

平成16(2004)年、石見町を縦断するように計画された道路建設(中山石見線)により、発掘調査が行われました。その結果、鎌倉時代から室町時代の遺構群が多数発見されました。

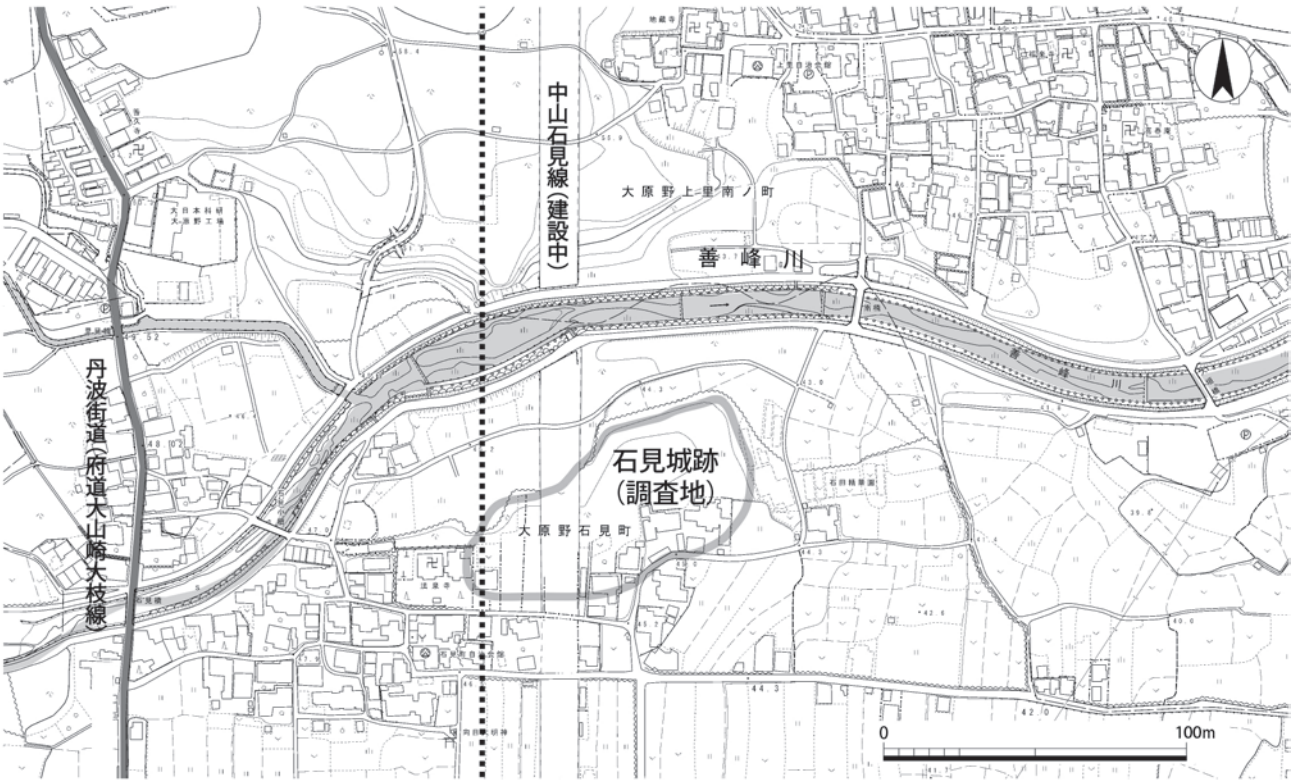


図１　石見城跡位置図

これらの遺構群が、凹凸が残る段丘崖付近へ広がる様相をみせたことから、この地点に城跡が存在した可能性がさらに高まりました。

令和２(2020)年、京都市文化財保護課は石見町の現集落及びその周辺を対象として航空レーザー測量を行い、微地形の詳細把握を試みました。その結果、地表面の細かい凹凸が明確に映し出され、これらが人為的な造作である可能性がより濃厚となりました。このため文化庁・京都府と協議を行い、５か年に及ぶ遺跡保存を目的とした範囲確認調査を計画しました。その後、土地所有者の方々の協力を得られたことから、令和３(2021)年から京都市による発掘調査が始まりました。



図２　赤色立体図(１：1,250)

調査の結果、当該地には石見城と推測される大型の城館遺構が残されていること、また現存する地表面の凹凸がその遺構を投影するものであることが確実となりました。この成果は、令和８年３月刊行の総括報告書にまとめ、一連の調査を完了しました。

２．調査の概要

調査面積の総合計983㎡(小数点以下繰り上げ、以下同)。

第１次調査　2021年11月29日～12月23日　　125㎡

石見城跡、長岡京右京一条四坊十町・十五町跡(右京第1258次)

第２次調査　2022年11月14日～12月21日　　242㎡

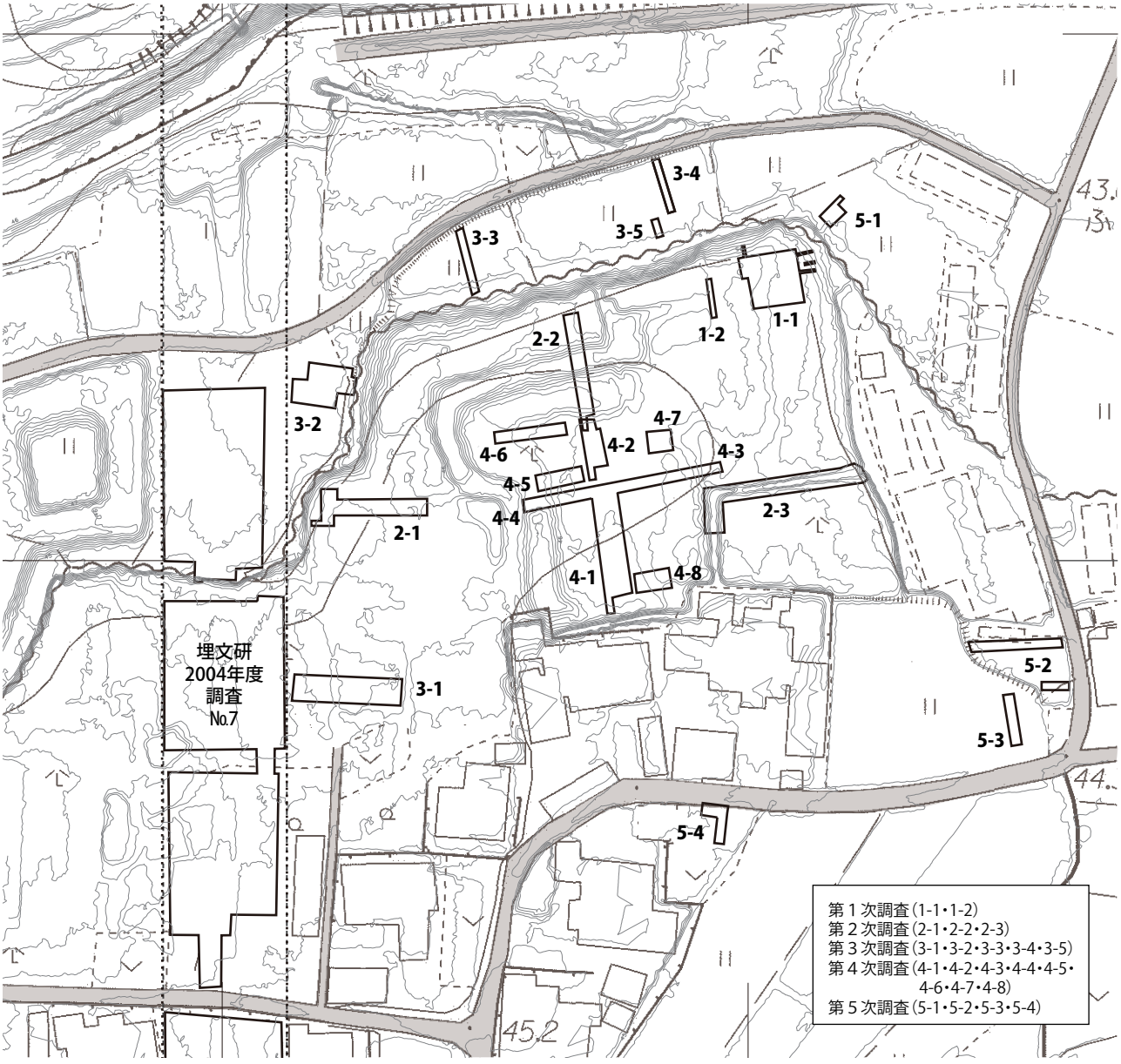


図３　調査区全体配置図(１：1,250)

石見城跡、長岡京右京一条四坊十町・十五町跡（右京第1269次）

第３次調査　2023年11月６日～12月15日　　212㎡

石見城跡（隣接地）、長岡京右京一条四坊十五町・十六町跡（右京第1283次）、大原野石見遺跡

第４次調査　2024年10月1日～11月22日　　307㎡

石見城跡、長岡京右京一条四坊十五町跡（右京第1303次）

第５次調査　2025年４月14日～５月８日　　97㎡

石見城跡（隣接地）、長岡京右京一条四坊九町・十六町跡（右京第1315次）

３．調査成果

一連の調査では、石見城と推定される城館跡の存在が明らかとなりました。また、その下層には古墳時代の遺構群が広がることも分かりました。以下、時代ごとに紹介します。

（１）古墳時代（図４）

段丘上の調査区では埋没流路が確認され、その最上層で庄内式土器（３世紀頃）の破片が採集されました。少なくともこの頃には地表面はやや落着き、一帯が人間の活動領域になったとみられます。ただし、段丘下では後世まで河川の氾濫が続いており、善峰川の旧流が段丘崖付近に迫る勢いで流れていたと推測されます。

段丘斜面に近い２－１区では、古墳時代前期の竪穴建物（たてあなたてもの）と推測される遺構を確認しました（竪穴2131）。埋土に焼土と炭化物が集積すること、また至近距離から土師器甕（はじきかめ）（庄内式（しょうないしき））が出土したことなどから、この地点が居住域だったことがわかります。また段丘上北東の１－１区では、古墳時代前期後半（布留式（ふるしき）後半・５世紀初頭）の小型丸底壺が一定量出土しました。集落が長期にわたり存続したことをうかがわせます。

古墳時代後期（６世紀）になると建物の数は増加し、集落の範囲も広がります。調査地の東辺は、現在、弥生時代～古墳時代の集落遺跡である大原野石見遺跡の範囲に含まれており、今回の調査でも、３－１区で竪穴建物（竪穴3160・６世紀）、２－１区で炉跡を備える竪穴建物（竪穴2130・６世紀前半）、４－１区で竪穴建物の可能性がある落込み（落込4106）等を確認しました。加えて、段丘下南東部（５－２A区）においても、竪穴建物と目される遺構を複数検出しました（落込5210～5212）。断（た）ち割りのみの掘削調査でしたが、遺構内よりTK10型式（６世紀前半）の出土遺物が一定量得られました。これらの成果により、大原野石見遺跡の集落範囲が、より東へ拡大することが明らかとなりました。

（２）鎌倉時代（図５）

村の形成　調査７－２トレンチ付近では、12世紀末頃から、掘立柱建物（ほったてばしらたてもの）や柵列（さくれつ）、井戸、

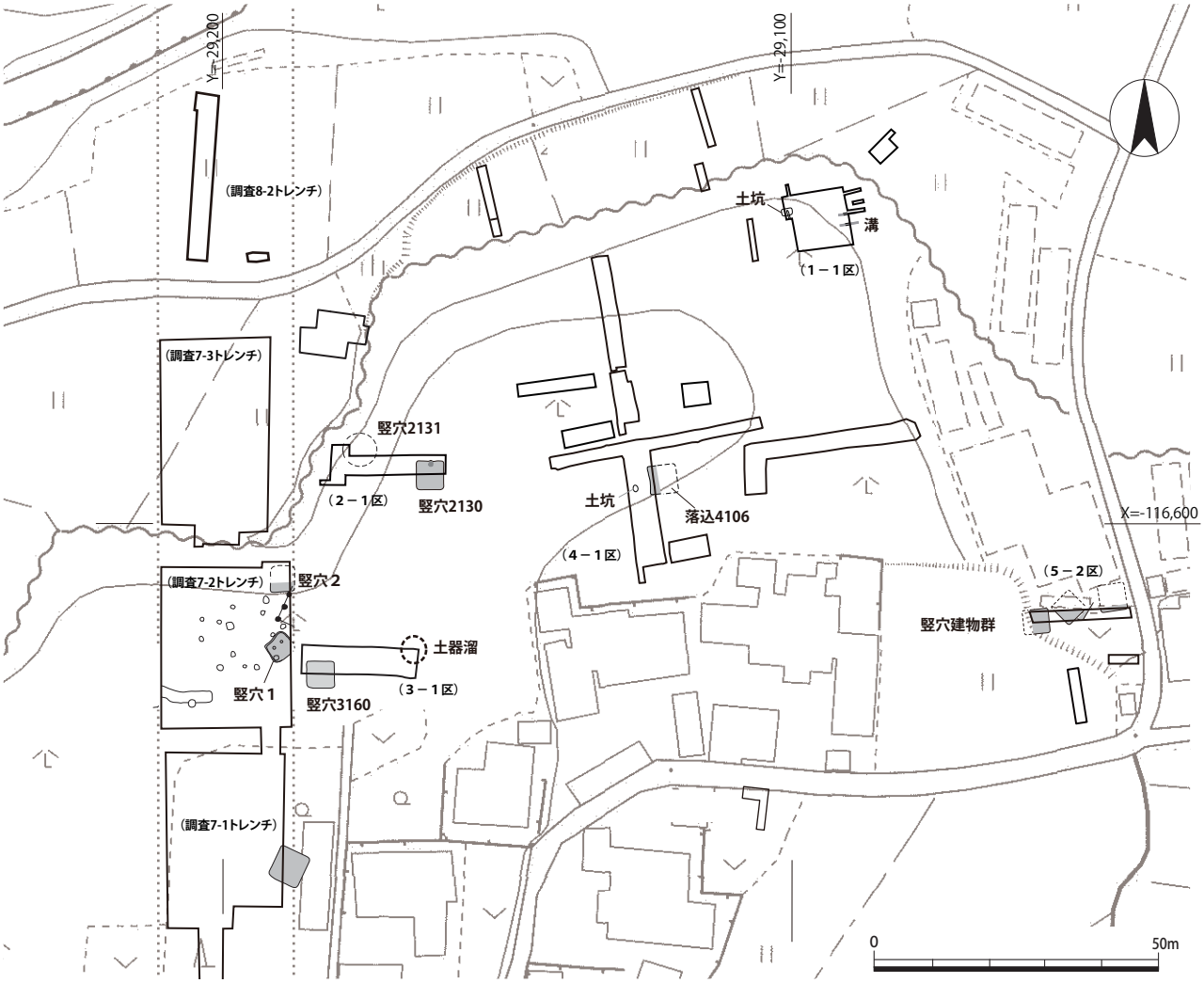


図４　古墳時代の遺構模式図(６～７世紀)

土坑(どこう)で構成される居住域が形成されます(西居住域)。一方、東半部の５－３区では、南西から北東方向へ流れる河川(流路4350)を確認しました。この河川が埋まった13世紀に、複数箇所で掘立柱建物を主とする居住域が展開しはじめます(東居住域)。柱穴間には切り合いがあり、遺構間の距離も近いことから、短期間に複数回の建て替えが行われたと見られます。５－２区・５－４区では、連続するとみられる大溝(溝5201・5411)を検出しました。東居住域の南東角をめぐるように設けられていることから、村の内外を区画する機能をもっていたと考えられます。

このほか、調査７の南では、東西方向の柵列が検出されました。ここを居住域の南限とすると、南北約140mの範囲が当時の居住域と試算できます。

石塁の構築　調査地の北西に設けた３－２区では、13世紀に形成された石塁(せきるい)(集石遺構3205)を確認しました。盛り上げた土塁の上に拳大～人頭大の石を貼り付けた構造で、調査７で検出された石積みの階段状遺構１につながると予測されます。石を多く積み上げる

水辺の施設は、中世村落の船着場施設としての機能が考えられますが、河岸に多種多様な土器が投棄されていたことから、集落の主が在地領主であった可能性が示されています。

堀と土塁の出現　城館の中心部（城館域）では、13～14世紀に堀と小規模な土塁が形成されはじめました。これらを繋（つな）ぐと南北長50m程度の堀で囲まれた空間を復元できます。一方、２－３区で確認した堀2313は、区画溝として機能したと考えられることから、これを方形区画の東辺として捉えると、その東西幅は40m程度となります。また、段丘の東崖はこの段階で大きく削られ、加工されました。

城館域では、方形の堀の中に小溝を設け、さらに、その内部に建物を配しています。４

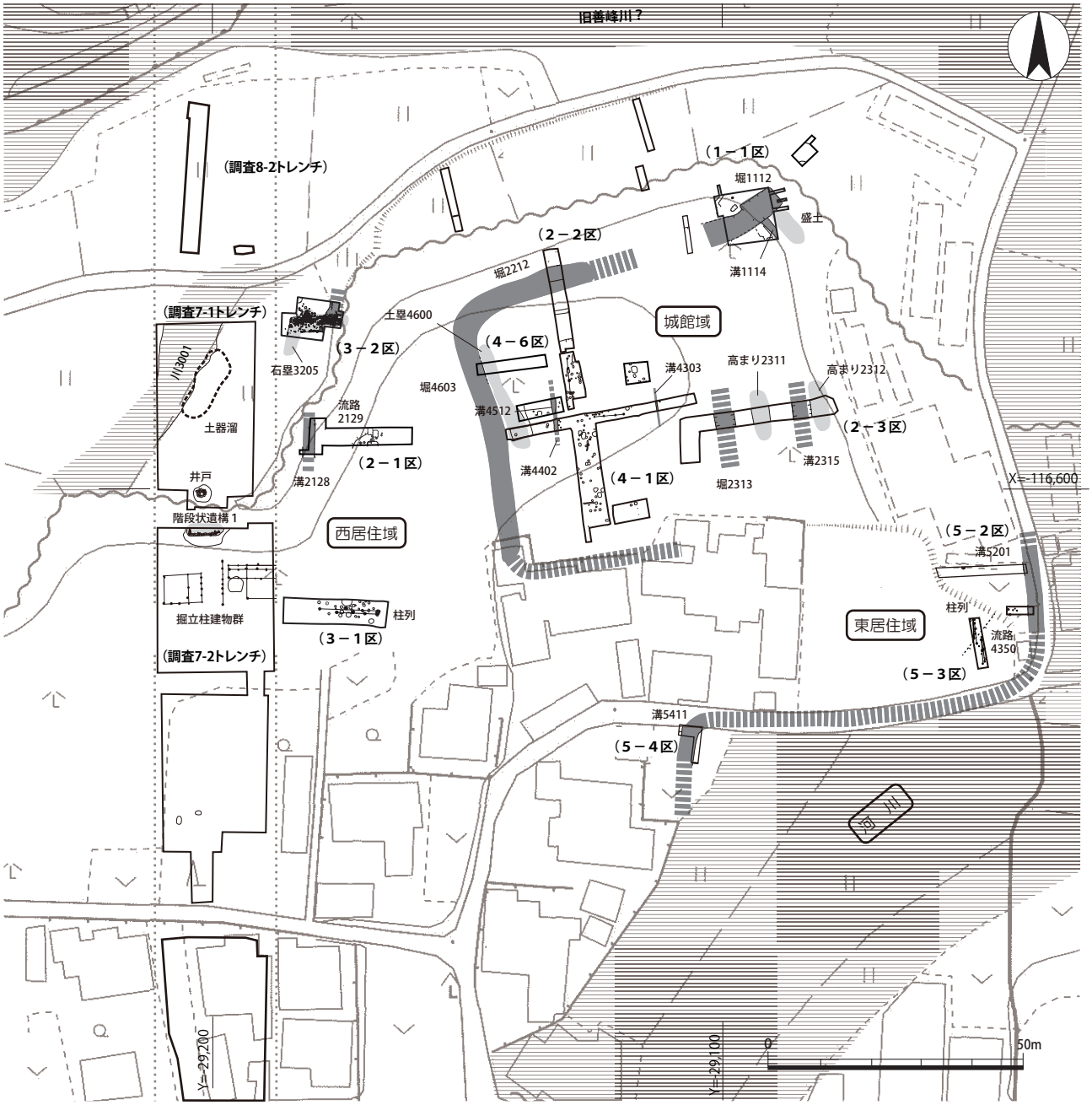


図５　鎌倉時代の遺構模式図（13世紀）

－３～５区では、溝4402と溝4512、溝4303（いずれも14世紀）が、設けられ、その内部に同方向の柱列（方位北に対して７度西へ振る角度）が復元できます。

（３）室町時代（図６）

居住域の変遷　14世紀後半から15世紀にかけて、集落は大きく発展します。調査７の２トレンチでは、建物や柵列が何度も作りかえられます。３－１区では区画溝（もしくは排水溝）で囲まれた掘立柱建物が出現します。なお、柱穴には被熱（ひねつ）痕跡を有するものが含まれていました。15世紀に石見館が戦火を受けたことを想起させます。

堀と内土塁の改変　15世紀には、郭（くるわ）を囲む堀と土塁が大きく拡張されました。２－２区

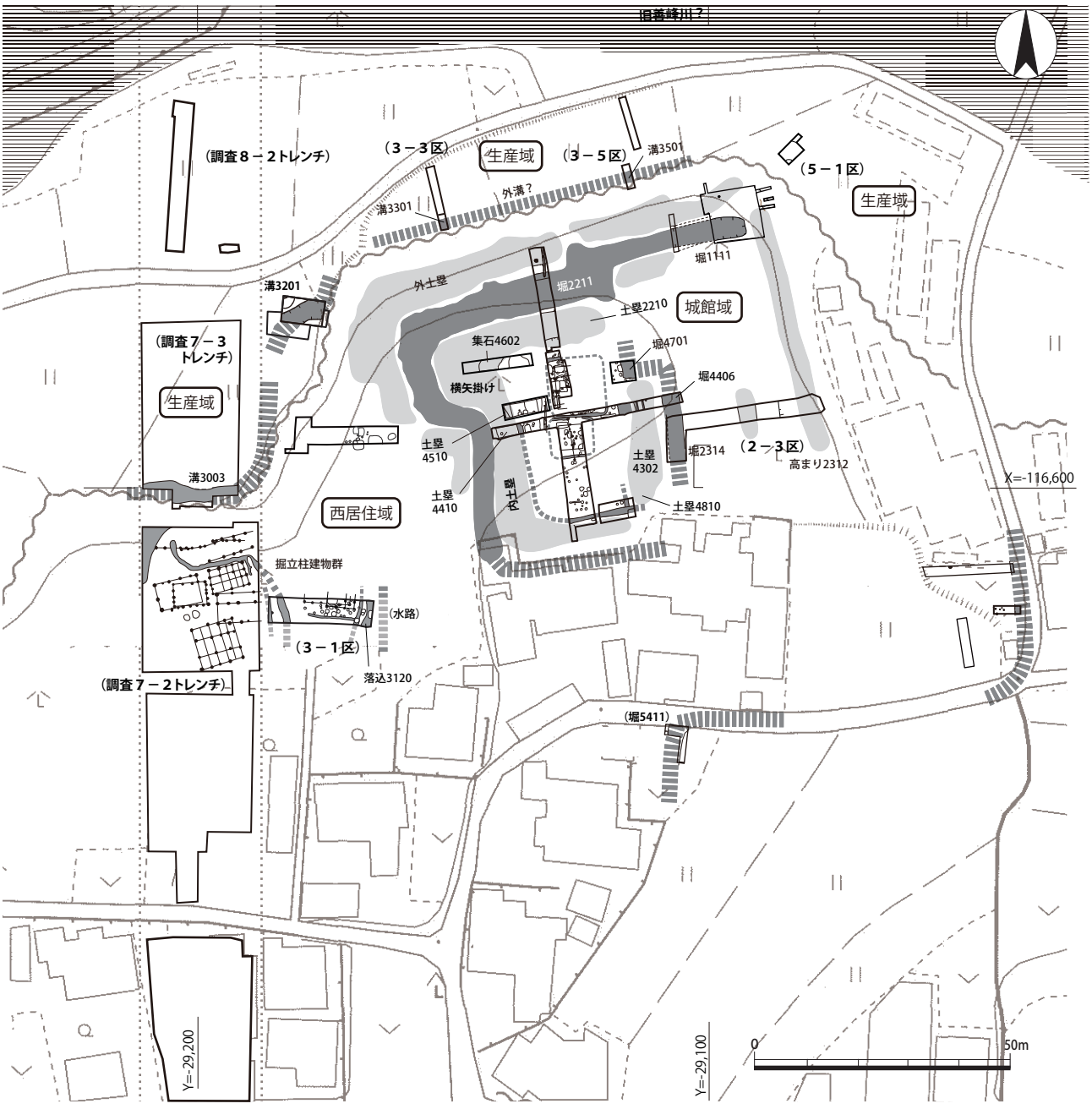


図６　室町時代の遺構模式図（13世紀）

で確認した北側の内土塁（土塁2210）は、水平に整えた地盤の上に、基底幅6.6～7.3mを測る規模で成形されています。また、西側の内土塁（土塁4410・4510）は、４－６区の西端で大きく張り出すように増築されました。この改変に伴い、コ字形にめぐる新たな堀（現存の堀）が西側に設けられました。この張り出しが、「横矢掛け」と指摘される施設に相当します。今回の調査では、この施設が当初から備えられていたものではなく、14世紀以後（15世紀頃か）に設けられたものであることがわかりました。

一方２－３区・４－４区では、埋没した堀を確認しました（堀2314・堀4406）。南北方向にのびるこの遺構は、屈曲して堀4701に繋がります。この最終埋没は15世紀で、郭が東へ拡張された際に埋められたものと考えられます。

４．石見城をめぐる動向

以上の発掘調査成果より、石見集落と石見城跡は13世紀頃に成立すること、また14世紀を通じて発展し、15世紀には城館の形態が大きく発展することが明らかとなりました。その頃の西岡地域はどのような状況にあったのか、文献史料を援用して確認してみましょう。

12世紀頃、石見地域は富坂荘の一部であり、春宮大夫藤原頼宗や橘前司規光の所領が入り組んでいたと考えられます。石見町の北方には字「橘樹山」があることから、橘規光の所領との関係が想起されます（『法泉寺文書』）。その後、13～15世紀には三鈷寺領となり、寂照院（長岡京市）仁王像胎内の康永３（1344）年の結縁交名に「石見里」の66人の名前が記されています。この時期が石見集落の発展期にあたるため、三鈷寺の庇護下にあったことが村の安定につながっていたと考えられます。

一方、その頃に西岡の土豪衆は台頭しました。建武３（1336）年、文献史料に初めて「山城国西岡」の名が現れます（『足利尊氏御教書案』）。西岡衆は幕府中枢の有力大名家の被官となり、その存在感を増していきました。『久我家文書』には「石見小野氏」の記載があることから、石見の在地豪族が小野氏であったとする見解が、現時点では有力です。寛正６（1465）年、室町幕府奉行人が土一揆対策のため西岡被官人の在京を命じていますが、そのうちの一人に西岡の土豪「小野新左衛門」の名がみえます。

応仁元（1467）年、応仁の乱がおこると、幕府近臣とつながりのあった西岡衆はいち早く戦乱に巻き込まれました。当初、西岡衆は細川勝元の率いる東軍に属して出陣し、西国から京都へ入ろうとする東軍を助け、西軍を阻止する役目を負っています。しかし文明元（1469）年、畠山義就軍に惨敗し、西岡を含む乙訓郡は西軍に制圧されました（西岡の戦い）。その際、丹波へ敗走した西岡衆の一将野田泰忠は、西岡奪回の機会をうかがい、文明２（1470）年に攻撃を開始します。これにより石見館は上里・井内の城館とともに焼失しまし

た(『野田弾正忠泰忠軍忠状』)。

小野氏の動向については、長享元(1487)年の『山城国西岡衆神足友春等連署状』には連署の筆頭に「小野太郎左衛門尉景行」があること、また上述の『久我家文書』には、石見小野氏が久我家の所領を横領していたと記述されることから、小野氏が西岡衆のなかでも有力氏族であったこと、その勢力は応仁の乱の後も健在であったことがうかがえます。年代的に見て、焼き討ちを受けたのも石見館に拠っていた小野氏であったと考えられますが、一族が滅亡することはなかったようです。

ただし、石見城はその後廃棄されました。『法泉寺文書』によると、慶長6(1601)年と慶長19(1614)年に小野守賢、小野孫兵衛なる人物が、石見村内の田畠や薮、屋敷を寺へ寄進しています(『永代寄進申一札之事』『法泉寺田畠山林藪屋しき寄進の次第』)。これらの史料からは、江戸時代初頭に至っても、小野氏が石見に所領を有していたことがわかるとともに、これを機に石見での権力を放棄したことがうかがえます。発掘調査では、江戸時代以後、石見城跡を含む一帯は畑及び竹林として使用されたことが明らかとなっています。

【参考文献】

黒須亜希子・馬瀬智光ほか 2026『石見城跡発掘調査総括報告書』京都市文化市民局

KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER

第 161 回埋蔵文化財セミナー資料
発行日　令和 8 年 8 月 22 日（土）

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターの現地説明会や埋蔵文化財セミナーなどの催し物は、下記のホームページでもご案内しています。

https://www.kyotofu-maibun.or.jp
公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒 617-0002　向日市寺戸町南垣内 40 番の 3
Tel （075） 933-3877（代表）　Fax （075） 922-1189

FB　X